

松田甲の「日鮮」文化交流史研究

権 純 哲*

Matsuda Ko's Studies on the History of Japan-Korea Cultural Exchange

KWON Soon Chul

はじめに

I. 松田甲、その生涯と経歴

1. 攻玉社
2. 参謀本部測量技手
3. 臨時土地調査局監査官
4. 逓信局吏員養成所教官、総督府官房嘱託

II. 文化交流の実践と交流史研究

1. 文化交流の実践：漢詩

2. 交流史跡の発掘と広報

- (1) 文禄の役以前の交流史跡
- (2) 豊臣の朝鮮侵略と捕虜の「美談」
- (3) 朝鮮通信使
- (4) 退溪李滉の江戸儒学者への影響

むすび

はじめに

この研究は、日韓文化交流史研究の源流を確認し、その学術史上の意義を考察しようとするものである。とくに文化交流史研究の一原型をなした松田甲（1864～1945）の学問的成果を手がかりにし、両国間の文化交流史研究の内容とその意義を明らかにするとともに、その研究史上の位置づけを試みたい。

松田甲の代表的業績といえる『日鮮史話』は、主に朝鮮総督府機関誌『朝鮮』に1922年から発表された記事をまとめ、朝鮮総督府による啓蒙用冊子として、1926年に第1編、2編、1927年に第3編、1928年に第4編、1929年に第5編が、1930年に第6編が、1931年に『続日鮮史話』第1、2、3編が刊行された。

このほかの業績として、断片な雑記をまとめた『朝鮮雑記』が1925年に出版され、その続編となる『朝鮮漫録』（1928）、その姉妹編となる『朝鮮叢話』（1929）と続き、また『朝鮮の今昔（歴代篇）』（1927）がある。これらの冊子は、「内地人」に対する「朝鮮」への観光誘致や「朝鮮文化」紹介のため¹に携行し易いポケット・サイズにして、朝鮮総督府より非売品として出版されている。

松田の「日鮮」交流史話は、原文の引用が多い上、「朝鮮人」の同化・皇民化の思想工作資料として利用された経緯もあり、その研究成果は、批判の対象にならなければ、無視されてきた感を否めない。たとえば、李退溪の江戸儒学への影響に対する松田の研究について、「支那」哲学研究の権威であった宇野哲人は、消極的評価しか与えない。²

歴史のなかに存在し、消すことの出来ない日

* クォン・スンチョル

埼玉大学教養学部教授、韓国思想家

韓文化交流の様々な事例や史跡は、最近しばしば話題になったりする。だが、その多くが松田によって発掘されたものであることは、それほど注意されていないように思われる。通信使がその代表的な例といえよう。しかし、その語りの違いには留意する必要がある。史跡からの語りは、語り手の解釈であるからである。史跡にその成り立ちがあるように、史跡からの語りもその成り立ちがある。この研究では、史跡も確認しつつ、むしろその語りの成り立ちに注目する。

以下、まず松田甲の学問形成過程と朝鮮での活動や研究の実態把握を主な課題とする。それは、『日鮮史話』が驚異的ともいえるほど1925年から31年という短期間に継続して出されたからである。このような執筆活動だけでなく、彼の詩社活動にも注目したい。これらをも含めて「日鮮」文化交流史研究に精を出した松田の業績内容を検討し、その意義を考察し、その評価をも試みたい。

ちなみに、文末に『日鮮史話』収録全記事と『朝鮮』掲載記事の対照表を付録したので参照されたい。

I. 松田甲、その生涯と経歴

まず、松田甲の生涯³について整理しておく。

松田甲は、1864（元治元）年7月7日に会津若松市に、藩士松田常義⁴、多美子の五男として生まれる。幼名は甲子五郎。数え5歳（以下同）の時、戊辰の役に遭遇、会津落城後、一家は、藩主松平容保とともに陸奥斗南藩に移り、さらに北海道札幌に移住し辛酸を舐める。「父の兄弟は幼時漢学を学び、漢詩の作り方は心得ていた」というのは、松田の東京遊学（15歳）前、苦難の日々のなかでのことであろうが、彼の修学状況や松田家の生活についてはよくわからない。²

歳上の兄竹四郎を養子に迎え入れた大竹作右衛門の北海道での活動⁵は断片的ながら確認でき、兄竹四郎こと大竹多気⁶は、工部大学校機械科第5回生として1883（M16）年5月卒業し、官立千住製絨所につとめ、のちに工学博士となる。

松田は上京の翌年、近藤真琴の攻玉社に入学し、測量学を修める。1882年（19歳）卒業とともに参謀本部の測量技手に任じられ、のちに日清・日露両戦役に従軍、1906年以降は臨時測図部の測量主任として、台湾、朝鮮、満州などを踏査、1908年には南清方面に、1909年には蒙古方面に派遣されて、実測に従う。その間、野口寧齋、森穂南等に師事し漢詩に励む。

1911年（48歳）に朝鮮総督府臨時土地調査局の技手になり、朝鮮での生活が始まる。1918年（55歳）に臨時土地調査局の解散とともに監督官⁷をやめるが、乞われて朝鮮総督府通信吏員養成所に迎えられ修身・国語を教授する。60歳となる1923年退官後は、朝鮮総督府官房嘱託となって文書課に勤務し、日本と朝鮮との昔からの関係を調査する。『日鮮史話』や『朝鮮雜記』などの著書は、このときの業績である。また朝鮮では「以文社」「忘機社」「漢襟社」の詩社活動を続け、退職する1933年（70歳）に古稀記念の漢詩集『皆夢軒詩抄』上中下を刊行、1945年4月には『忘機小舫詩存』（一卷）を刊行し、同年7月17日に朝鮮で世を去る。享年82歳であった。

以下、松田の経歴を中心にして学問的背景や学問的素養の形成過程、その時の活動内容を整理しておきたい。

1. 攻玉社

松田は、1879（M12）年から1882年（19歳）卒業まで約3年間、攻玉社で学んだ。当時の修学内容や環境をうかがうため、主に『攻玉社120年史』（攻玉社学園1983。以下、『120年史』と略称）によりつつ関係資料からその状況を整理してみる。

攻玉社は、1863（文久3）年、近藤真琴（1830～1886）によって江戸四谷坂町鳥羽藩邸内に開講された蘭学塾を起源とする。長崎海軍伝習所の第一期生として、海軍兵学寮最高幹部、海軍中佐兼兵学中教授となった近藤真琴は、徳川幕府の海軍が榎本武揚艦隊の壊滅で終わりを告げると、1869年に築地に創設される海軍操練所（後海軍兵学寮をへて1876年海軍兵学校と改称）の教官となり、同年10月、築地の海軍操練所内一橋邸跡（後に慶應義塾跡）に移り、塾則・教則を定めて攻玉塾と称した。和魂漢洋才をモットーとして、蘭学・英学による航海術・測量術を中心とし、国漢学・数学・物理化学・地理・歴史などを教授する私学として発展し、法経系の慶應に対し理工系の攻玉として名を馳せるほど、攻玉塾は、東京で最も有力な塾の一つになった。1875年には航海測量習練所（1880年商船寮と改称、1886年廃止）を開設、1880年陸地測量習練所（1884年量地寮と改称）を開設、1889年海軍予備科を開設して、海軍兵学校への進学予備校として有名となった。⁸

入社について、1872年3月に東京府へ提出された塾則には、つぎのように書かれてある。

一、入社入塾ハ毎月二ノ日ノ事

一、凡ソ入社ノ式ハ社長ニ白扇一対⁹ヲ納メ器械料トシテ塾エ金千疋ヲ授スヘシ、入塾ハ右ノ外塾僕エ金一朱ツ、与フヘキ事

一、凡ソ入塾申込ミ有之者ハ九ノ日ニ来ツテ明キ有之ヤ否ヤヲ聞クヘシ、明キ有之時ハ引請人戸籍住居等明細ニ認メ置ク可シ、一ノ日ニ塾僕ノ者差遣シ引請人ニ面会ノ上詔書等エ合鑑ヲ受取ラシム、其節引請人ハ手数料トシ金五十疋塾僕ニ授ス可キ事

（文中句読点：権）

この手続は、後に入社日を月曜日にし、束脩

（入社金）を三円に改めた以外はほぼ変化がなかったという。これは、おそらく太陽暦の採用（1872.12）と近代貨幣制度実施（1871）による変更だろう。

入社願書を提出した者は簡単な試験をうけて、例えば英学は八級だが数学は六級というように、英学・数学・漢学それぞれの学力相当の級に編入された。入社試験時の模様について、松田より1年後入塾した山屋他人（岩手出身：1866～1940:M19.12海軍兵学校卒業。T8海軍大将）は「自分の予想と違って先生の私邸の方へ呼ばれたので、私は恐る恐る玄関を這入り先生の書斎のような室へ導かれると、先生が机を控えて端座して居られ、そこで何でも十八史略を読まされた」と、意外にも漢学の素養が重視されたことを記憶している。

授業や進級は、英学・数学・漢学の三各科毎に九つの級に区分されて、半年ごとの試験で一級ずつ進級させるという仕組みになっていて、この半年ごとの大試験をうけて進級することを「卒業」と言った。大試験の他に一ヶ月ごとの小試験もあり、英学・漢学は真琴自らが試験をした。塾生は順番に真琴の私邸に呼び出され、その前に正座して素読をする。例えば英学の試験の場合、リーダーのこの部分を訳せといわれ、すらすらと出来るとさらに上級の米国史の問題などが出される。こうしてつまる所まで累進（M14年入塾の丹羽鋤彦）したり、入社直後一箇月経って臨時試験を受けて進級（M15年入塾の小笠原長生）したりしたという。攻玉社で松田が経験したのもこのような風景であったろう。

松田が在塾したときのカリキュラムの一端は、1880年1月提出の航海術習練所の商船寮と改称上申書に付録した1875年の「私学分校願」「航海術測量専門」学科の以下のような「教則」と、1880年5月提出の「陸地測量教則」¹⁰にうかがうことができる。

航海術測量専門

予科

算術之部/加減乗除 製図用図 実測
分数少数諸等 幾何積名
比例開平方/代数大意 製図式 推測器械積
対数用法/平三角算法 三角規半円規用法
推測器械用法
弦三角実算 地図地球儀講義 六分儀積名

本科初級

推考針路 地図応用/十字測 六分儀用法
天文大意航海曆用法/高度算法 高度実測
緯度算法 緯度実測
時辰儀論/測時法 時角実測

本科上級

経度算法 経度実測
測法 方位実測
潮汐算法 信号旗用法
航海日誌

陸地測量教則

予科

加減乗除 分数 小数 諸等 比例 開方
代数学 対数用法 平三角算法 幾何積名 幾
何学 平三角算法

本科前期

量地術ニ於テ使用スル諸器具ノ説明
野簿記載式 連鎖測量法
方位測量法 角度測量法
高低測量法 普通製図練習
実測図製法 縮図法
截面図製法 実積算計法

本科後期

諸測器改正并用法
測量実地因習
実測図製造

「陸地測量」の三科は「各毎月小試験ヲ為シ

又六ヶ月ノ後卒業試験ヲナシ合格ノ者ハ卒業証
ヲ附与ス」とあって、進級は前述と同様である。

参考のため、松田修了2年後の「明治17年9月
攻玉社開申書」の「攻玉社中幼年生学科課程
表」を『120年史』から再引用しておく。

つぎに、『開学明細書』(M6. 1、第二巻第二番
中学区)¹¹収録の攻玉塾主近藤真琴から提出(壬
申11月)された「私学明細書」によると、学科
は皇漢学・英学・算術測量とあり、教授書籍概
略には「政記 皇朝史略 十八史略之類并自著
仮名交り日本誌略」、「英文 地理誌 博物誌
史類 天文誌 航海書等 算術測量ハ海軍兵学
寮官板教授書」、「自著算術初学 英ホットン氏
チャンブル氏 米ロビンソン氏 ダフューズ氏
航海書 英ゼーンズ氏 ノリー氏等」とあり、
教育体制の整備の証のように教科書¹²も多様化
されていく。

また、同資料に詳述されている教員18名全員
が近藤の教えを受けた人々であるが、明治10年
代、日本の教育制度が少しずつ整備されていく
につれて、東京大学や札幌農学校等を卒業した
学士を教師として招聘するようになる。「外国教
師 無之」とあったのが、1873 (M6) 年4月に米
国人ペルキンソンを幼年科の英語教師として雇
い入れてから、外国人教師は、明治20年頃まで
ほとんど絶えることなく、海軍兵学校、慶應義
塾、商法練習所等の教員名簿の中にも見える、
当時の教育界では有名であった人が多かったと
いう。

以上の整理から、松田が1879年から1882年ま
で3年間、学んだ攻玉社の教育システム、教科お
よび学修内容をうかがい知ることができたと思
う。攻玉社が航海測量習練所開設 (1875)、海軍
志願者のための別科開設 (1879)、陸地測量習練
所開設 (1880) と拡大していくなか、英学・数
学・漢学を修めつつ、測量学をも学習した松田
は、文明開化、富国強兵の時代にふさわしい学

《参考》「攻玉社中幼年生学科課程表」

	学科		数学科	英文読書部	和漢文学部	通計
	学期					
	各学科毎週授業数		十二時	十二時	十二時	三十六時
第一年	六ヶ月間 授業日数 凡百二十日	級外	四術分数 小数等	英語綴 ウィルソンの第二リードル	国史略 小学読本 日本地誌 習字 通俗書簡	学科数三
	同	八級	諸比例 百分算 開放	ハーラー万国史 ガヨット地理書	国史略 講義 習字 通俗書簡	同
第二年	同	七級	算術 求積 雑題	ケックボス米国史 スエール羅馬史	国史略 講義 習字 通俗書簡	同
	同	六級	代数一次式迄 対数	マカム英国史 ピネラ大文典	日本外史 習字 真片仮名文	同
第三年	同	五級	代数二次式迄 幾何釋名	ゲートリッチ仏国史 ガノー窮理書	日本外史 真片仮名文	同
	同	四級	平三角術 代数温習	チャンパー近世史	十八史略 真片仮名文	同
第四年	同	三級	高等代数 弧三角術	テール万国史	左氏伝 記事	同
	同	二級	代数幾何 截錐幾何	ソーネネルソン伝 マコーレーライブ伝	左氏伝 文章軌範 論文	同
第四年半	同	一級	微分 積分	マコーレーバースチング伝 ウエラント経済書	左氏伝 文章軌範 論文	同

問と技術を身につけていたといえる。半年ごとに各科について一級ずつ卒業すると、九級、四年半で全科修了となる教育システムの下で、松田は2級以上累進したことになる。

松田より2年前ごろに在塾していた志賀重昂が「日清の役黄海々戦の日本軍艦々長は殆んど悉く其の旧門下生に係る。攻玉社の一私塾を以て、日露戦役の頃、海軍将官五人、佐官百五十人、尉官二百人、機関官百人を出し、商船には日本郵船会社船長監督を初め甲種船長十余人を出し、海海上には商船学校及び高等海員養成所の教員、造船所の技師、海員掖済会の事務長に至るまで門下に出る者指して屈すべからず、近藤真琴は実に日本海上上の恩人なり」¹³と褒めたたえるほど、攻玉社出身者の活躍ぶりには目

覚ましいものがあったという。このとき松田は、参謀本部陸地測量部に勤めながら、日清戦争後の台湾鎮定作戦¹⁴に従軍し、また日露戦争にも従軍するほか、韓国・満州・蒙古・南支において測量の任を遂行して行くのである。

2. 参謀本部測量技手

参謀本部¹⁵は、1878 (M11) 年参謀本部条例制定により陸軍省から離れて設けられ、管東・管西の二局があり、伴属に地図・編纂・翻訳・測量・文庫の5課 (M13年電信課が新設) があった。1885年に第一・第二局への機構改革の時に伴属にあった地図・測量課は、新たに測量局に昇格し、三角測量・地形測量・地図課が設けられた。陸地測量部は、1888年測量局は昇格したもので

ある。1882年に参謀本部の測量技手となった松田の勤務部署は、測量課→測量局→陸地測量部と名称が変わっていく。

松田の参謀本部時代について、「半年間は東京で、暖かくなると各地に出張し測量して廻るので、勝れた風景の山河に接することが多く、湧き出る詩情は夜、宿舍の燈火の下で漢詩や和歌になった」と、出張地での詩作について述べたのち、松田ゆきは、その稽古状況をつぎのように伝えている。

漢詩は「随鷗吟社」に入り「学鷗」と号して野口寧齋、森槐南両先生に師事し、和歌は本名の「甲」で井上通泰先生の「南天荘」の同人となり、書は永坂石埭先生の教えを受けて雅趣ある書風であった。俳句には「皆夢」の号を用いた。休日はこれら諸先生の許に通って教えを受けるのが常であったという。

「随鷗吟社」は、森槐南が1904年に大久保湘南と起こした詩社で、『随鷗集』を刊行した。森槐南（1863～1911）は、明治詩壇の覇を唱えた春濤（1819～1889）の子として、はじめ詩を父に、漢学を清人金嘉穂に学んだ。14歳のとき父に従って上京し、外国語学校に入学したが、退学して鷺津教堂、三島中洲らに就いて漢学を修めた。18歳（M14）で太政官に出仕、以後、枢密院属、帝室制度取調局秘書、図書寮編集官、宮内大臣秘書官、式部官などを歴任。晩年に帝国大学文科大学講師を兼ね、1911年文学博士となる。慧敏博識、政治力に富む能吏の風があり、さきには三条実美に知られ、のちには伊藤博文の信頼を得て、その後援をうけていた。伊藤がハルビンで暗殺された時、随行¹⁶しており、ともに銃創を蒙った。槐南を中心に永坂石埭、野口寧齋、大久保湘南らによって盛んだった漢詩壇は、槐南の死によって急に衰退していった。¹⁷

野口寧齋（1866～1905）は、維新後、内閣小書記をつとめる父松陽が漢詩文をよくし、森春濤と親交があったことから、父の死後、哲学館に入り、かたわら漢詩を森春濤、槐南父子に学ぶ。1890年、漢詩の結社「星社」が組織されると、寧齋も槐南門下の有力者として参加し、社中に断然頭角をあらわし、詩壇の鬼才と目された。1903年雑誌『百花欄』を創刊、全国から名詩を集めて寧齋みずから編集し同土に頒布し、詩壇に対する刺激となるとともに当時における漢詩の流行に多大な影響を与えた。社友には三島中洲、依田学海、森槐南、国分犀東などの漢詩人のほか、副島種臣、乃木希典、洪沢栄一、山県有朋、伊藤博文ら政財界の有力者らも多数加わっていた。当時、綱島梁川、横瀬夜雨と三大病詩人とよばれ、境遇、技倆、名声ともに正岡子規に匹敵するとして二大病詩人とも称された。¹⁸

松田との関係は、『太陽』（1895.10）「雑録」に掲載された紀行文「南征漫録」に記されている。依田学海（1833～1909）の「与野口寧齋」と野口寧齋の返信「学海先生に復するの書」に続き、掲載されている「南征漫録」の冒頭には「編者曰、名は甲、福島県若松の人、詩を槐南寧齋諸人に学びて、青年作家の目あり、職を陸地測量部に奉じて、現に台湾にあり、本編は同地よりの通報に係る」という紹介文がある。また「今年二月遼東の地に至り、朔雲を踏み、胡塵を侵し、従軍せしト殆んど十二旬、六月の末東京に凱旋し、塵事多端親戚知己の訪問をも為さずして、更に又南征の途に上らんとし、新橋と発せしは実には是れ七月十八日なりき、寧齋主人余が行色を壮なりとし、驢るに其著はす所の大轟余光一部と、七言律詩一首とを以てせらる、…余久しく吟壇諸士の知遇を受け、公事匆忙の際獲る所の詩篇少なきは殊に遺憾とする所、況んや去夏以来星社雅集の席に臨むの機なく、吟

壇諸士に向て疎遠を極む…」とつづく、「星社」仲間への近況報告であるが、設立当初、槐南がその盟主に立てられ、多数の青年漢詩人を傘下に収め、華々しく活動し、小説界の硯友社に比せられた「星社」は、内紛により1899年ごろ瓦解する。¹⁹ 松田の文章は、詩社師匠の紹介により掲載されただろう。台湾鎮定作戦に従軍し『太陽』に連載した（松田ゆき）とあるが、確認できるのは、この一回のみである。

井上通泰（1866～1941）の号が南天荘。「余は慶応二年十二月二十一日、播磨国姫路元塩町に生まる。父は同藩の儒者松岡操。余は其の第三子なり。明治十年の冬、同国神東郡吉田村の医師井上碩平の養子となれり。同十三年の春東京に上り、同年の冬、東京大学医学部予科に入り、同二十三年の冬帝国大学医科大学を卒業す、爾来医科大学付属病院眼科助手たること二年余、県立姫路病院眼科医長たること又二年余、岡山医学専門学校眼科教授たること凡そ七年余、同三十五年の冬東京に帰り、丸の内、内幸町に於いて私立眼科医院を開く。明治三十七年九月論文を提出して医学博士の学位を受く」（『家庭衛生叢書』中川恭次郎編、井上通泰監修）が、上京してから作歌に励み、森槐外、賀古鶴所、佐々木信綱らと「常磐会」を興し、歌壇に重きをなした。1907年以降13年間御歌所寄人をつとめた。実弟に民俗学者の柳田國男や日本画家の松岡映丘らがいる。井上の上京以降の活動に松田も参加したのであろう。後述のように、朝鮮在住「南天荘同人」の作品が松田により朝鮮総督府機関誌『朝鮮』に紹介されている。

松田が書を学んだとある永坂石埭（1845～1924）は、名古屋生れ。本名周二。医師の家系で東京へ出て医を開業する。漢詩を森春壽に学び、漢詩人・書家として一家をなした。神波即山、丹羽賢、奥田香田とともに森門の四天王といわれた。

以上でとくに注目されるのは、松田の当時漢詩・和歌・俳句・書の大家名人の下での稽古である。その関係人物²⁰は、近代学問の学識の上、伝統の和漢洋学を兼備しており、また政財界の重鎮大物とも親密な関係にあった点にも注意されたい。松田の生涯において、このような人的ネットワークが大きく寄与しているように考えられるからである。

松田の詩社活動²¹は、つぎのようである。

- ① 「星社」のメンバーで、1897年晩秋の「星社会合聯句」28名の28句に松田の一句もある。
- ② 森川竹溪主宰の『鷗夢新誌』の作家である。
- ③ 関澤霞庵の「雪門会」のメンバーである。
- ④ 森槐南主宰の『新詩綜』の作家である。
- ⑤ 野口寧斎主宰の『百花欄』の作家である。

いっぽう、参謀本部の命によって松田は、朝鮮での測量経験を持つのだが、その思い出の一例が「天然炭酸水に名を得たる椒井里」（『朝鮮』1923. 4）に記されている。

顧みれば日鮮併合以前であつた。予は参謀本部の命を帯び、数名の測圖手を監督して、全州・公州・清州・忠州等の方面を遍く踏査した事がある。時は多分六月と記憶する、清州より清安へ行く途中で、椒井里といふ處に薬水があるのを聞き村童に案内させて行つて見たのである。成程泉は湧いて居たが、水面には蛙さへ泳いで居て…遂に飲まうと云ふ氣が出ないので匆々と見過ごしたのであつた。それから二月ばかり経つて清州の方へ引き返す時、夜に入つて其處を過ぐると、此度は前日と丸で變つて、千數百の老若男女が群集し、相争つて之を汲んでは飲んで居る、のみならず、數知れぬ程飲食物を賣る露店さへあつて、或は踊り或は謡ひ、燭火焰々天を燒くの繁雜喧囂を極めて居るのを目撃し、始めて遠近に知れ度つた薬水である事を確かめ得たので、擔

任して居つた五萬分一の地形圖上に湧泉の記號を書き入るゝ事とした。椒井里に湧泉ある事を地圖に於て江湖に知らせたのは、予等の一行を嚆矢とするのである。

このとき、測量監督と地図作成に従事した松田の経験が朝鮮勤務のきっかけになつたかも知れない。この「全州・公州・清州・忠州等の方面を遍く踏査し」製作した五万分の一図²²は、1911年から13年に発行された。

3. 臨時土地調査局監査官

松田は、日韓併合の翌年に渡鮮する。松田のつとめる臨時土地調査局の官制は、1910年10月1日から施行され、1918年11月勅令第375号により廃止、同月2日に朝鮮土地調査終了式²³が行われる。

この臨時土地調査局は、保護国時期にあつた土地調査局の業務²⁴を継承したものである。総裁・副総裁各1名、部長2名、書記官3名、事務官5名、技師7名、主事120名、技手270名になる土地調査局の初代総裁には高永喜が、副総裁には学部次官であつた俵孫一がそれぞれ任命され、また調査部長には臨時財産整理局の書記官であつた佐々木藤太郎が、測量部長には日本陸軍工兵大佐であつた土屋喜之助が任命されたが、局員の多くは臨時財産整理局の局員をもつて充てられた。²⁵主要なポストに日本人が就いていたのは、言うまでもなく、日本の保護国であつた所以である。

日韓併合後の土地調査事業において日本人採用について、『朝鮮土地調査事業報告書』（朝鮮総督府臨時土地調査局、1918）のつぎの記述²⁶から推測できる。

内地（日本）に在りて土地に関する事務は、地租条例施行以来、税務機関に於て既に数十

年来経験せる所なり。又近年沖繩及台湾に於て特別なる土地の整理又は調査を施行せられ、従て土地調査の経験を有する者鮮しとせず。又三角測量の如き特殊の作業には陸地測量の経験ある者を採用するを最得策と為す故に、本局事業を開始するに先ち、其の計画又は監督の任に当り、若は特種の作業に従事すへき職員は、主として此等経験ある内地人を採用することとせり。今各種作業に応じ経験者として採用したる重なる者を列挙すれば、(一) 三角測量には陸地測量の経験ある者、(二) 細部測量には沖繩又は台湾等に於ける土地測量の経験ある者、(三) 準備調査一筆地調査又は地位等級調査には沖繩又は台湾の土地調査又は内地に於て税務の経験ある者、(四) 製図には陸地測量部其の他に於て製図に経験ある者、(五) 面積計算簿書調製又は地価算出には内地税務其の他に於て成るべく是等の事務に経験ある者等なりとす。 (句読点：権)

松田の朝鮮勤務のきっかけの詳細は、まだ不明であるが、この五つの条件のうち(一)、(二)、(四)を松田はみたしている。1911年4月、永石光吉郎とともに陸地測量技手従七位勲七等から、朝鮮総督府臨時土地調査局技手²⁷に任じられ、1912年6月「九級俸下賜」の時に臨時土地調査局監査官とあり、同年12月に「叙勲六等授瑞宝章」、1913年12月に「三級俸下賜」、1914年12月には「陞叙高等官七等 朝鮮総督府臨時土地調査局監査官従七位勲六等 松田甲」と陞叙・昇級し、1918年「高等官七等三級 正六位勲六等」として臨時土地調査局の解散を迎える。このとき松田は、数え55歳であつた。

臨時土地調査局での活動のうち、1915年白頭山の地形測量をおこなつて3年後に発表した「白頭山の登攀」²⁸の「附記」からは、その責任者として松田の自負をうかがうことができる。

頃日京城日報記者は國境横斷旅行をさなむとし、其予告せる文中、大冒険、前人未踏の秘境、人跡未到の地等と記しあるも余が一行に依つて白頭山大森林の地形圖實測せられたる以上、最早朝鮮に人跡未到、前人未踏と稱すべき地なし、又白頭山以外大冒険と言ふべき處は朝鮮に於てあらざるなり、余は前に陸軍の臨時測圖部、後朝鮮の臨時土地調査局に職を奉じ、多年朝鮮地理踏査に従ふ、乃ち茲に該記者の蒙を啓かむが爲め數言を附記する所以なり。

さらにこの7年後「予は往時久しく同山を跋涉した、因つて胸底より記憶を喚び起し、聊か以て登山の参考に資せんと」して発表した「白頭山に登りし追憶」(T15.6稿、第二編：以下、『日鮮史話』を略し編のみ記す)に述べられている当時の経験を、ここに紹介しておきたい。

(前略) 今日同山の精確なる地圖はあるかと云ふに、乃ち是れ大正五年朝鮮総督府臨時土地調査局の地形測量に依つて作製したるものを推さざるを得ぬ。但、其の五萬分一圖は梯尺上、軍事機密に屬し、これを縮小したる二十萬分一圖が世に公にされてゐる。要するに此圖を描きて白頭山の精確なる地圖は無いのである。尤も此の地形測量を行ふには、基本たるべき三角測量を其の前年に於て施されたのであつた。予は當時土地調査局監査官の職を奉じ、十六名の技手數十名の測夫より成れる地形測量班の作業を監督して、此の深林内を跋涉した。班員は各々只猛獸の徘徊する寂閑たる無人の境に、數箇月間、三四里づゝを隔て、天幕生活を營み、困苦缺乏を物ともせず、奮勵努力して、精確なる地圖を測成した。予はこれを空前にして又絶後の大事業と稱するに躊躇せぬ。

猛獸だけを警戒した対策ではなかつただろうが、「殊に予等の深林に幕營中、惠山鎮守備隊の小峯大尉が二十余名の兵士と共に登山して」行った「空前にして又絶後の大事業」だったのに、「一体東洋人は地理と云ふ觀念が乏しい、地図を見ることは大嫌いだ、朝鮮に居てあの臨時土地調査局で測製した地形図のあることを知らぬ人もあるやうだ。朝鮮の高山の事にせよ、鴨綠・豆滿兩江の源にせよ、誤つて居ると云ふものは結局地図を等閑に附しゐる証拠である。実に遺憾の至りに堪えない」と、東洋人の地理觀念の欠如や地形図の存在すら知らない在朝内地人の理解不足につき松田は歎いている。前の『京城日報』記者の無知への松田の痛烈な批判が、このように書きなおされているのである。

これと対照的に、徐命膺(1716~1787)の『遊白頭山記』を取りあげて朝鮮知識人の測量实例を紹介する松田のその間の博覽強記には感心する。

此の記中、輕々看過してならぬのは、白頭山頂の東南二里たる臙脂峯に於て、象限儀を以て緯度を測り、 $42^{\circ}3'$ を得しことである。これを其の後百四十九年。乃ち大正四年に、臨時土地調査局が三角測量を行ひ、白頭山の最高頂大正峯を $41^{\circ}59'28''$ と算定せしに較べ、殆んど一致してゐるのは奇と言はざるを得ぬ。彼れの記中、六月十二日の條に「古人作事常兼數事、吾輩若但爲看山玩水則淺矣。關防形便可相度也。北極出地可測候也。遂求材與匠作象限儀」と書いてあるよりしても、彼れは當代に傑出せる知識の所有者たりしに相違ない。

このように松田は、業務と関係する朝鮮文献の調査²⁹をも怠らず、朝鮮知識人の文化的・知的水準を高く評価し、詳細に紹介しているので

ある。

4. 逋信局吏員養成所教官、総督府官房囑託

1918年に臨時土地調査局の解散とともに監督官をやめ、松田は、朝鮮総督府逋信吏員養成所の教官に転じる。養女ゆきによると、「大正七年四月、臨時土地調査局は任務を終えて解散になり、父は東京に帰るつもりで土地を用意してあったが、漢詩を通じて父の内鮮交流上の役割は大きく、京城に留まることを関係方面から懇請されて永住の決意をする」という。同年4月、副事務官11人を9人に、技師5人を4人にする臨時土地調査局官制の改正（勅令第98号）があり、解散準備に入っていたこのごろ、松田は帰国準備をしたであろう。懇願した「関係方面」とは、まず詩社ネットワークの人々の可能性は最も高い。いずれにせよ、朝鮮永住を決意した松田は、逋信吏員養成所の教官を5年間勤め、60歳となる1923年に朝鮮総督府官房囑託として文書課に勤務することになる。

逋信局吏員養成所は、逋信および電気逋信業務を担う吏員養成システムを拡張して、1918年1月に発足し、逋信乙種伝習生（郵便局の逋信事務：第5期より）、航路標識伝習生（第3期より）、逋信別科伝習生（第1期より）を養成・輩出した。たとえば逋信乙種の場合、1学級30～40名の一組を、1学級50名の三組（朝鮮人1組、日本人2組）に増設した。教育期間は9～10ヶ月であった。1922年9月には、逋信事務の中堅となる高等科逋信生の養成も開始する。逋信乙種伝習生の卒業の優秀な者として実務1年以上従事した者から選抜し、1年間教育、授業科目は、修身・電気逋信術・逋信法規・電気学・英語・法制・経済・物理・化学・事業管理法・数学・地理・朝鮮語（日本人に限る）・日本語（朝鮮人に限る）・会議文・体操などであった。³⁰ 1919年3月1日に勃発し全国的に広がっていった独立運動以後、朝

鮮総督府の全国的逋信体制構築と勤務要員の養成が急務となっていた時期に、松田は吏員養成所教官になったのである。

このときに松田が書いた『朝鮮逋信協会雑誌』収録の「逋信事業に関する意見の寄稿を軽視する勿れ」（説林、第25号、1920.11）、「業務と時」（論説、第31号、1921.9）、「同情心」（論説、第32号、1921.11）、「大正十年を迎へて感を書す」（論説、第33号、1922.1）、「青年期の読書」（論説、第34号、1922.3）、「朝鮮に在住する内地人の責務」（論説、第35号、1922.5）などの記事からは、「修身」と「国語」担当教員の風貌を感じることができる。

このような吏員養成教育に携わりながら動き出した松田の「日鮮」文化交流研究は、本格化していき、さらなる期待があった故に、朝鮮総督府官房囑託になったのであろう。

朝鮮総督府官房による朝鮮総督府機関誌は、1915年「朝鮮に於ける各般の状況を蒐録する」から「朝鮮に於ける諸般の状況を広く知悉する」へその目的が変わり、『朝鮮総督府月報』から『朝鮮彙報』へ改題し、また『朝鮮彙報』の『朝鮮』への改題（1920.7）があった。このような変化は行政末端の役人だけでなく、一般人への広報をも意識したからである。³¹

この間、1919年の三・一独立運動の勃発により、朝鮮統治に対する批判と反省の声が高まり、新に赴任した朝鮮総督齋藤實と政務総監水野錬太郎により謳われた「文化統治」という新たな環境の出現があった。松田の活躍はこれと無縁ではなく、むしろ松田の研究活動によって「文化統治」の中身がより着実に蓄積されていったといえよう。松田の詩壇・詞壇を中心とした詩作活動は、文化的交流の実践の例であり、朝鮮総督府機関誌『朝鮮』などに載る松田の記事は、発掘した「日鮮」文化交流史跡の広報である。これらの記事は、資料調査のための史跡を訪問

するなど、相当計画的な調査研究によるものであり、『日鮮史話』の出版も計画的に行われたことに見受けられる。おおむね囑託となってからのことである。

II. 文化交流の実践と文化交流史研究

松田の朝鮮での活動は、今まで見てきたように、臨時土地調査局勤務に始まった総督府技術官としての測量と地形図製作が主であったが、「父を語るには先ず漢詩から始めねばならない」というように、むしろ詩人としての活動こそ看過することのできない重要な事からである。文化交流史研究は、詩人としての活動により開かれ、さらに深まったものとみることもできるが、むしろ松田の漢学者たる面目を発揮したものといえる。松田の書いた記事を見ると、文化交流史に関しては「儒教より観たる内鮮関係の二三例」（『朝鮮』1922.5）がほぼ最初のようなのである。「曰く内鮮同化、曰く内鮮融和、之を事新らしく思ふ人もあるが、実は古くから行はるべきのが、障害も出来、紛争も起り、実現が後れたまである」と始まって賢谷鄭東愈、青泉申維翰、大塚退野、村主玉水、高本紫冥について簡単に紹介して終わっているが、それぞれの詳細な研究がさらに展開されていくのである。

以下、松田が実践した朝鮮文人との文化交流の実態を整理、考察した後、彼の文化交流史研究について検討することにしたい。

1. 文化交流の実践：漢詩

まず、漢詩活動についてみてみたい。松田は、朝鮮赴任当初から詩作を発表していた。すなわち、松田の漢詩「示鮮人某」「羽衣巷卜居」「彈琴台」の三首は、釈尾旭邦主幹の『朝鮮』1911年10月号にいち早く掲載されている。11月

号には、松田への期待と経歴や家族関係などを記した魯堂平井参の「送松田学鷗之朝鮮序」³²という紹介文が載っている。また12月号に、「華陽洞紀游」10首が載り、その後、投稿漢詩にコメントも付けるなど、「漢詩」欄にかかわっていく。この『朝鮮』は、1912年1月より『朝鮮及満洲』に改題し1941年まで続いた。「以文会」創設に参画、「忘機社」と「漢襟社」を主宰した松田だが、ここでは、まず「以文会」活動の一例を紹介しておきたい。

「以文会」³³は、韓国併合の翌年、内地人と朝鮮人有志の発起により、「日鮮人が相和し経学を講究し詩文を研究する」目的を以て組織され、1912年1月7日に創立の総会が開かれ、会長に朴齊純、副会長に國分象太郎、松田甲は久芳直介、尹致昨、鄭丙朝とともに幹事に推薦される。臨時土地調査局赴任から程なくして朝鮮最高の社交界の幹事になるほど、その文才が認められていたのであり、それは、日本詩壇ネットワークの朝鮮への拡大と理解できよう。「以文会」の活動が一般に広く知られるのはこのごろであろう。1920年11月21日、政務総監邸で行われた秋季例会の様相³⁴は、つぎのように描かれている。

南山秋方に暮れ落葉雨の如く灑ぐ折柄十一月念一日、以文会秋季例会を水野政務総監邸の聞香閣に開催す。閣は南山脚下に在り、會は内鮮文人を以て組織せられ會員一百有餘を有せり。此の日會する者は主人の風流相公、會長一堂李完用、主幹天民和田一郎氏を始め侯爵朴泳孝、男爵朴箕陽、徐相勛、鄭萬朝、李熙斗、魚潭、呂圭亨、鄭鳳時、趙秉健、尹致昨、韓永源、その他の文星にして内地人側に在りては梧庭國分象太郎、學鷗松田甲、成田魯石、江原如水、小永井槐陰、安藤掣雲の外、久保田天南、海岡金圭鎮の兩畫伯にして、且畫き且書く、且飲み清談笑噓、満堂春の如し。

號令嚴肅にして白戰身に寸鐵を帯ぶるを許さず、翅だ筆劍墨戟時に鏘鏘として藤刺を躍することあるのみ。興酣なる頃主人香堂博士は乍ち毫を舐めて故人相見一堂中、抵掌笑談情自融云云の一絶を賦す。衆胥な之に唱和し順次自作を書す。二十有餘篇綺句麗詞燦然として紙上に映す。鄭萬朝毫を呵して之が序を作る。此くして酒三行の後、一幅の大畫箋紙は卓上に展らる。香堂博士先づ情味真の三字を揮ひ、次で一堂李伯群賢雅集と書し、次から次と聚賓得意の巨腕を揮ひ、秋蛇筵に趨り雲煙朶朶たり。此くて津津たる興味將に盡きむとする一殺那、乍ち坐の一隅より、今日此の雅集再びなからざるべからず、誰か政務總監邸の五字を詩化し塵氣を一掃せざらむや、と動議を提出すれば、先づ香堂博士之を賛し遂に衆議一決、聞香閣と命名して朴泳孝李完用之を額面に揮ひ鄭萬朝之が記を作れり。今は之を表幟して同邸の楣上に掲げりと云ふ。此の日翠袖の横斜を點することなきも煌として電燭の長夜を照すあつて長へに内鮮同化の光芒を放つが如し。 (句読点一部：権)

「内鮮」文人による詩作揮毫の風流を競い合う宴会は、政務總監を中心に展開され、この記事にはその権力・威厳が象徴的に描写されている。とくに朝鮮文人についての記述が多いのは、「内鮮同化の光芒」をより明らかにするためであろう。この「以文会」メンバーの漢詩は、たびたび総督府機関誌『朝鮮』に収録され、和歌も登場する。

「朝鮮は到底日本人の想像も及ばぬ程、詩を尊んだ国である。学者とか紳士とか云はるゝ人には必ず詩集、文集がある。所謂兩班なる者は詩を作らなければならぬ事となつてゐた。此の風習は今でも尚ほ残つてゐる」³⁵と記しているように、松田は、朝鮮兩班の詩作生活に相当な

理解をもって、その社交上の有効性を認識していた。「漢詩を通じて父の内鮮交流上の役割は大きい」かった分、期待され、それに応えようと松田自身務めたのであろう。

松田の漢詩や和歌は、『朝鮮及滿洲』のほか、主に総督府機関誌『朝鮮』に収録され、『朝鮮通信協会雑誌』³⁶にもある。たとえば漢詩「小春雅集」「小春雜集」(『朝鮮』1920.12)、「白頭山十律折六」(同1924.8)、「六大江」(同1935.8)、「施政二十五周年記念日書感」(同1935.10)、「金剛山遊記」(同1935.12、1936.4,5,7,8)、「悼茂亭鄭大提学六首」(同1936.6)、「皆夢軒近稿」(同1936.10)、「欽題田家雪山首」(同1937.1)があり、在鮮南天莊同人との和歌(同1923.4)、「風痕露滴」(同1936.9)、「破れ葉集」(同1936.10)がある。松田は、『朝鮮』「詩壇」漢詩の選者(1928.1~6の例)としても活躍するが、1937年以後の彼の詩は見られなくなる。

また、松田自身が主宰した「忘機社」の活動について、久保天隨の「金剛山の一句(上)」(『朝鮮』1923.4、全4回連載)に「今次朝鮮行における第一の目的も、この山の探勝に在ることとより言ふまでもない。八月十日の夕に東京を發し、舟車二晝夜と少して、十日の夜、京城に着いた。その翌十三日は、松田学鷗君を始とし忘機吟社諸子の催して、舟を漢江に浮べ、日鮮の詩客二十四名と江上の清風に吟嘯して、心のどかに、一日を遊び暮らし…」とあり、「忘機社」メンバー交遊の一端をうかがい知ることができる。天隨久保得三は、『朝鮮史』(博文館、1905)の著者でもあり、『朝鮮』に漢詩「三韓樂府」(1922.11,12)、「七台詩追和李退谿」(1924.6)、「金海納陵」(1924.7)や紀行文「朝鮮古都めぐり」(1924.7~12、全6回)などが掲載されている。松田が最晩年に刊行した詩集名は『忘機小舫詩存』である。

いっぽう、『朝鮮』詞壇の、たとえば「井上通

泰先生門下咏草」(同1922. 12, 1923. 1)と「在鮮南天莊同人會員咏艸」(1923. 2, 1923. 3, 4)には白石資鐵(京城)、田淵績(京城)、松田甲(京城)、平山ひさ子(京城)、國分禮吉(釜山)、坪井孝(京城)、佐々木信一(大田)、渡邊啓次郎(群山)、岡敬孝の名がみえる。このように、朝鮮在住の井上通泰門下の活躍を後押しする松田は、和歌など日本文化の朝鮮への移植の一翼を担っていたといえよう。

つぎに、詩壇と関連した朝鮮文化史跡の保存にも松田は心がけていた。「東岳先生詩壇に関する調査」(『朝鮮』1922. 8)がその一例である。「今日、京城にも大都市経営の挙あらんとし、市区の改正も一層拡大せらるゝであらう。其の際等閑に附してならぬのは、名勝古跡の保存³⁷である。それについても、京城の歴史を調査する必要がある。地名なども相当由緒があるである。彼の銅峴の如きは黄金町と改められ、又雲峴と泥洞とは合して雲泥洞とされ、清風洞と白雲洞と合して清雲洞とされる等の事もあれば、名勝保存のためには、史跡は十分調査ありたい」³⁸と、行政区画の再編や都市開発により希薄化されつつある郷土意識、古跡名勝の保存意識を指摘する。そして「今より十一年前、中西古竹氏が「東岳先生詩壇」の六大文字を彫刻せる岩壁を発見された。そこは彼の曹谿寺住職(大隆大定師)が日韓併合記念のため、巨鐘を鑄て之を吊るした鐘樓の東方約百二三十歩を距る松林中であると同氏の直話を聴いたのであつた。当時予は土地調査局の用務多忙を極め、其の後も南船北馬寸暇なく、之を見る機会を得なかつた。然るに大正七年の春同寺を訪うて、住職に逢ひ、談偶此事に及ぶや、住職もやつと見つけたばかりであるとの事で、予を案内せられたのであつた。今は現場まで幽径も開かれてあるが、予の初めて見た時分は、密生せる林藪で容易に捜しあてることが出来ぬ状景であつた」と、これま

での経緯を説明する。「詩壇」の存在を知ったのは、彼の朝鮮赴任間もない時であつた。そして松田は、憲宗時代の隨筆『見聞筭記』から李安訥の遺稿『東岳集』へと読書を進めていき、この詩壇正体究明の手がかりを、『東岳集』収録の数首の詩に付せられた註にみつける。

(前略)此の三註を綜合すると、東岳の家は樂善坊墨寺洞の又溪に在つて、墨寺洞は東平館の東で昔時は寺があつたと云ふのである。それで京城の古き地圖を見ると、今の大和町二丁目邊は倭館洞、同三丁目邊は墨洞としてある。…今でもあの邊を「モクチヨルコル」即ち墨寺洞と稱へて居るとの事であつた。東平館の事は、『東國輿地勝覽』に在南部樂善坊、待日本諸國使とあり。景宗時代に出來た春官誌には倭館之在京城者年久迹湮人或瞠焉とある據ても東平館の在つた邊を倭館洞と云つたものと想はれる。又溪と云ふのは不明であるが、詩句にある、淡煙蠻館巷南橋即ち大和町三丁目の通から遞信局官舎へ入る處に架けてある橋より僅か南に溯ると、遞信局長官舎の方からと大和町二丁目の方から流れ来る水が出會つて三叉を成してゐるから云つたのであらう。尤も三百餘年も昔の事であり、地形上、又地質上より考へても彼の川は東の方即ち山に近寄つてたに違ひない。

続いて、当初の目的「東岳先生詩壇」の六大字の正体を明らかにするために、徳水李氏の著名文人、東岳の姪沢堂植、沢堂の子畏齋端夏、孫睡谷奮、曾孫の箕鎮、遠縁の桐決の文集などを通じて、それが玄孫周鎮によって刻まれたと結論付ける。

牧谷と桐江との詩文の如く、此園と邸とは當時其の富一世に冠たりとまで云はれた綾城具

氏乃はち東岳の養母の里方の居であつたのが東岳の有になつたのである。其後東岳は實兄なる安訥の嗣子栲が資産極めて貧しく住家さへなかつたので邸園一切を彼に與へたのであつた。然るに栲の曾孫徳欽（東園記中の教官公）に至り之を他に賣らんとしたるを、東岳の玄孫周鎮（東園記中の都憲公）が譲り受け荒廢したのを修復したのであつて、『東岳先生詩壇』の六大字は則ち周鎮が刻させたる事が判つたのである。

この文には、松田の調査がどの程度だったのかが如実に示されている。つまり松田は、植民地首都の都市開発が進む中に生成消滅する地名の歴史性と名勝古跡の保存をうったえとともに、岩壁の六文字の由来を追究して関係文人の文集などを渉猟しているのである。このようにして日本と縁の深い「東平館」の存在を明らかにすることもできたが、最後「此稿を終るに際し、最も遺憾なるは墨寺の古蹟の不明なる事である。予は昨年大和町三丁目通信局官舎及び曹谿寺附近の山谷を全部測量したことがあつて、地形を十分知るを得たが、どうしても曹谿寺の位置あたりでなければ寺院のあるべき場処がない。殊に同寺の庭の直ぐ上なる松林より山背の間には、家屋の敷地とも認むべきものが三四箇所あり、高麗時代の瓦が地中より出るのを以ても、或は寺院の址かと想はるゝであるが、之に就ては識者の教を乞ふのである」と附記し、測量による地形の把握や出土の高麗時代の瓦をもって推測はできたものの「墨寺の古蹟の不明」を遺憾にしている。

この詩壇の六大字の正体を究明していくなかで、松田の朝鮮詩ひいては朝鮮文化への関心が高まっていった³⁹と思われる。

2. 交流史跡の発掘と広報

今までの引用資料においても、文化交流史に関する松田の学究姿勢をうかがい知ることができるが、ここでは、さらに松田の研究内容や実態について『日鮮史話』収録記事からみてみたい。その「はしがき」(1926.2)に「本書に載する所は是れまで朝鮮研究者より閒却せられたる事項に就て鄙見を述べたものである。もとより感興に乗じて筆を執りし為め、各題目は關聯もなく、時代を逐うて叙列したのでも無い、又往々重複して書いた所もある。要するに、確信すべき史乘、文集の類、及び予が実地の調査より得たる隨筆に過ぎぬ。幾分にては朝鮮を知らむとする人の参考とならば欣幸である」とあり、従来の「朝鮮研究者より閒却せられたる事項」とは、『日鮮史話』という書名が示している「日鮮」交流史に対する研究にほかならない。

(1) 文禄の役以前の交流史跡

両国の交流史跡を取りあげる際に、まず松田は、朝鮮にとって日本との和平の重要性を強調するのが一つの特徴と思われる。その一例⁴⁰をみてみよう。

古來朝鮮に於ては、博多に絡はる傳説もあれば又史實もある。就中其の著しきものとして諸書に記せるは、新羅の朴隄上、高麗の鄭夢周、及び李朝初期に於ける申叔舟の事である。

(中略) 申叔舟に就ては茲に筆を擱き、他の一切を省略する。但、特に書き遁してならぬのは、彼れの病に臥して命旦夕に逼るや、當時の王、成宗は使を馳せて、彼の言わんと欲する所を問はれたるに、彼れは乃ち、願くは日本と和を失ふなかれと對へて瞑したことである。後ち七十年退溪李滉も亦た、日本と交を絶つは社稷の憂に關し生靈の命に係ると上疏した。兩賢の戒めは一致してゐる。他日暗澹たる戰雲八道を掩ふたのも、此の戒めを等閑に附したからである。

日本との友好関係の維持を強調した申叔舟の遺言や李滉の戒めを等閑に附したゆえに、「他日八道を掩った」「暗澹たる戦雲」とは、豊臣の朝鮮侵略のことであろう。

さらに松田は、戦乱によって両民族の意識に恨みが蓄積されている事実⁴を述べる。すなわち「日本と朝鮮とは、古代の交通及び地理的・人文的の関係より観ても、融然和合せらるべきもの」なのに、「高麗元宗及忠烈王が、元の忽必烈の大兵と合し、日本を征服せんとする首謀者且先導者と為りて、対馬を陥れ、松浦を掠め、転じて博多に寇した」こと、また「其後百三十余年、李朝太宗が、倭寇剿滅の挙を企て、一の間使をも日本に遣さず直に船艦二百二十余艘・軍兵一万七千余人を以て、対馬を攻撃した」ことによって、「日本の大なる恨みを買った」ことを指摘する一方、「文禄慶長の両役」によって「日本が朝鮮より恨みを受けた」ことをも指摘する。しかし、「朝鮮に來援したる明軍の横暴も、亦慶長役後三十余年入寇した清兵の蹂躪も、総べて日本軍の行為の如く附会してまで憎むに至った」と、朝鮮人の意識の偏狭さを指摘する。このように「相互の出征が善隣の道を破壊して、両国の融然和合し得ざる重なる原因となった」とし、その背景に「支那が常に朝鮮を脅威して、日本との親和を妨害したる事」の存在を強調する。

戦乱を惹き起した朝鮮の対日本外交の失敗は、朝鮮の判断ミスのほか、支那の脅威と妨害がその背景にあったという指摘は、元寇や文禄の役のときを例にとってはいるものの、日清戦争前後から盛んに語られた歴史観である。

そのいっぽう、友好例も紹介している。「足利時代、周防の山口に雄鎮を占め、武勇海内を圧せしのみならず、明国及び朝鮮と、交通勘合の事を管掌し」た「大内氏と朝鮮関係の一斑」(1926. 4. 稿、第二編)で、松田は「其の先百済

王聖明の三子琳聖に出でた」大内氏と朝鮮との血縁関係を明らかにし、「大内氏対朝鮮の事蹟たる、日本の交通史又文化史上、甚だ緊要」であることを強調し、一例として、朱子学の受容をあげる。

(前略) 義隆が、朱氏新註五經を朝鮮に求むるに至つたのは、其の家臣たりし南村梅軒の勧誘に出でたるものなりと言はれてゐる。日本に於ける朱子學が、桂庵和尚によりて薩摩に興り、其の脈は後年藤原惺窩に傳はり、所謂京師學の基礎を成した時に、一方に於て土佐に起りし海南學の祖たる谷時中の系統は、乃ち梅軒より出でたものである。梅軒は離明翁とも號した。彼れが周防國吉敷郡宇野令白石(今は山口町に屬す)に住して居たことは、『大内氏實録』に書いてある。而して彼の薩摩に寓した桂庵和尚も本は山口の産であつた。斯くも桂庵と梅軒が山口の人であり、若し又梅軒と義隆とが叙上の關係ありとせば、藤原惺窩が朝鮮の姜沆の助力を得て、京師學の祖と爲りしを併せて、日本に於ける宋學史上、大に興味ある問題と謂はねばならぬ。

「朱氏新註五經」を朝鮮に求めた大内義隆の日本朱子学史上の功績とともに、日本朱子学の二系統(桂庵和尚→藤原惺窩)の「京師学」と(梅軒→谷時中)の「海南学」がそれぞれ朝鮮と緊密であつた大内氏の山口の人によって開かれたことを強調する。つまり、先進文化受容につとめた大内氏の努力と、朝鮮との友好関係がもたらした日本の學術文化の發達の存在を明らかにしているのである。

また、「山口洞春寺の朝鮮古書 附桜園寺内文庫」(1926. 4. 稿、第二編)において、山口での朝鮮本の搜索をする松田は「世々文学を嗜み、又甚だ修禪の道に篤かつたので、絶えず朝鮮と

通交し、多くの佛典・経書等を輸入した」大内家の古書がすでに散逸したことを確認する。そして、同地洞春寺に所蔵する「我が国学問界に意外の貢献を為せしとも云ふべき豊太閤の征韓役に、舶載せられたる書籍」の調査も予想に反する結果となったが、「図らずも其の失望を慰するを得たのは、故朝鮮総督寺内正毅伯の記念文庫」の存在であった。松田は「和漢書 五千四百四十冊（六百四十七部） 朝鮮本 四百三十二冊（四十六部） 唐本 一千八百五十五冊（九十九部） 朝鮮古簡牘法帖類 百九十一冊（百五十部） 支那法帖類 七十二冊（三十五部）」と、大正十一年末調査の「桜園寺内文庫」状況を紹介し、つぎのように言う。

就中、四十六部（四百三十二冊）の朝鮮本には珍書もあり、海印寺に印刷せしめられたる大藏經の幾分をも積んであつた。…殊に百五十部（百九十一冊）の朝鮮古簡牘法帖類に至つては、李朝歴代諸王の御筆を始めとして、碩儒の遺稿、書軸等の中には、復たと手に入れられざるのみか、世上無比の珍重すべきものもあり、一々これを展覧せんには數日を要すべきは勿論、到底今日朝鮮に於て見る能はざるもの、多きに驚いた。又堆く積まれし古來の諸大家、及び王政維新の功臣志士等の書畫幅の筋書きは、すべて伯の筆せられしものであつたなどに由つても、伯が文事に深大の趣味を有せられしを知るに足ると同時に、伯を以て單に武斷政治家とのみ信ずる人に此の桜園文庫あることを知らせたいと思ふたのである。

朝鮮関係書籍は、第3代韓国統監、初代朝鮮総督をつとめた寺内正毅が在任した6年間のコレクションであろうが、寺内正毅は、「桜園文庫ノ記」に「意フニ、士氣ヲ喚起スルハ歴史ニ若ク

ハナク、歴史ヲ蒐ムルハ先ツ我帝国ノ史乗ヲ經トシ我ト密接ノ關係アル朝鮮支那ノ史乗ヲ緯トスルヨリ急ナルハナシ、是レ我桜園文庫創設ノ趣旨ニシテ他ノ一般図書館ト自ラ其ノ趣ヲ異ニスル所以ナリ」⁴²とあったが、この趣旨はともかく、大内氏の収集した書籍が果たしたような文化受容や交流の役割をこの「桜園文庫」に期待できる時代ではなくなっていたのである。

大内氏の功績を称えるための舶來朝鮮図書の調査が、同じ山口出身の寺内の文庫の存在をもって、武斷政治家という世評に対して「文事に深大の趣味」の持ち主という新たな寺内像の提示と周知へと、松田の当初の目的から替わっている。むしろこの附録記事に松田のメッセージが強く示されている。

（2）豊臣の朝鮮侵略と捕虜の「美談」

つぎは、豊臣の朝鮮侵略の時に連れられてきた捕虜をめぐる「美談」である。

「豊太閤の朝鮮を征せる文祿役は、第一軍、小西行長・宗義智・松浦鎮信等の六将。二軍、加藤清正・鍋島直茂・相良頼房の三将を先鋒と爲し、第八軍、宇喜多秀家。第九軍、羽柴秀勝・細川忠興の二将とを殿として編制された」⁴³のだが、**第一**に、細川忠興の部将なる南條玄宅が日本に連れてきた捕虜の一人、慶尚道仁同県監李宗閑を取りあげる「朝鮮人を祖先とせる熊本の碩学高本紫溟」（1926.1.稿、第一編）からみてみたい。

宗閑は細川氏の領地たる小倉に來りし以來、忠興の子なる忠利に優遇せられ、遂に其の恩に感じて、子慶宅を侯の家臣として徴に應ぜしめた、慶宅時に年八歳、候は乃ち高麗、日本二邦の名を取りて、氏を高本と命じ醫業を學ばしめ、年十二の時禄百石を賜ひ、其の後細川氏の肥後に移封せらるゝや、熊本城の二の丸に邸宅を賜はつた。今尚ほ大手南坂の西

に慶宅坂と稱する處は、其の邸前なりと傳へらる。慶宅二十三歳、天草亂鎮撫の役に従つて負傷し、功に依りて禄を増され三百石を賜はり、遂に侍醫と爲り、寛文五年病を以て歿した。其の子幸宅（後に慶宅と改名）時に年十一で家を継ぎ、元禄十四年、禄百石の増加あり、其の歿するとき、子無かり故、門弟京都の人加藤司權兵衛の子玄常をして其の家を繼がしめ食禄二百石を賜ひ、外様醫師を命ぜらる。玄常の子を玄碩と云つた。玄碩も亦た子無く、藩醫原田宗昆の六男を養つて其の嗣と爲した。是れ即ち紫溟である。

李宗閑の子慶宅に、高麗と日本から取った「高本」という氏を与え、医業を学ばせ、その子孫が藩医として優遇され、〈李宗閑→高本慶宅→幸宅（後に慶宅と改名）⇒玄常→玄碩⇒紫溟〉という家系が成した、というのだ。この紫溟は、九州における藩学の嚆矢で文教の中心である熊本の時習館初代の教授秋山玉山、二代の教授戴孤山を継ぐ三代の教授の重任に就いたのであるが、彼の祖先思いの「美談」はこうである。

肥後に於ける諸種の文獻を觀るに、彼れは尊稱して、いづれも李先生と云うてゐる。彼れ自身も亦た紫溟と書きしは少れであつて、多くは李順と署してゐる。是れ言ふまでもなく、祖先崇拜の至誠より出でたるもので、之を畏敬し、之を仰慕し、而して系圖を絶やさず、祭祀を續けると云ふ念慮が無ければ李氏を稱する理由はない。

紫溟の「李順」という自署と印影を、紫溟の遠縁なる在京城堀直喜氏所蔵の書幅より撮影して収録している松田は、「全く血縁の繋がらざる彼れが、朝鮮人たる祖先の姓李氏を称せし事は、洵に奇特の志であつて千古の美談と謂はねばな

らぬ」と述べ、「其の時代の朝鮮は、日本を呼びて蛮夷と爲し、文学なく礼儀なきものとして輕侮せしこと」と対比する。祖先崇拜の礼を尊ぶ朝鮮兩班知識人に、「千古の美談」を伝え、その日本蔑視意識を変えてもらいたい松田の願いからであろう。

第二に、「日本教化に大功ある朝鮮出身者 本妙寺日遙上人 附、加藤清正に殉死したる金宦」（1925. 11. 稿、第一編）の例である。松田は、「文禄・慶長兩役の俘虜にして、日本に居る者は優遇を受けたるに反し、帰国したる者は、極めて冷淡苛酷の処置を受けた」ことにより、俘虜召還に意を尽した通信使の努力に関はらず、「帰を望む者の尠なかりし事」を明らかにする。「日遙は敢て斯る考より日本に留まつたのであるまいが、彼の当時好んで日本に帰化した者の多かりし」ことを再確認したうえ、つぎのように言う。

彼れは戰亂中の迷兒たる困境より轉じて未知の異邦に入り、難境苦境に心身を修練し、歳未だ不惑ならずして本妙寺を中興し、古稀の老齡を以て護國寺を創建した。其の行爲や實に壯とすべきである。但その歸國を得ざりし一事は憐れむべきものである。然し彼れは已に因果と諦めた。彼れの父も亦其の文面より推すも情理に通じた人と觀たるゝ。思ふに俱に運を天に任せたものと信ずる。而して當時の朝鮮が、佛教に壓迫を加へ、民をして安心立命の歸趨に迷はしめ、僧侶を視ることを奴隷の如くなりしと反對に、日本に於ては神・儒・佛の三者を以て國を治むるの教となした。彼れの如きも異邦の人たるに拘はらず、護法布教の權威を與へられ、活潑々地の行動を爲すを得た。果して顯著なる名譽は『高僧傳』中に勒せられ、之に加ふるに、其の朝鮮の人たるを贊揚する爲に、日遙上人と云ふよりも、

寧ろ高麗上人の稱を以て永遠に尊仰せらるゝ所となつた。

「戦乱中の迷児」は、後述する洪浩然記事に「上人も亦た壬辰役中、加藤清正に扶けられたる齡十三の少年で、日本に渡来後、五山に於て学修した」とあるように、五山で学修した後、本妙寺を中興し護国寺を創建する日遥上人になる。帰国を諦めた事情は、引用文のようにしか説明できないだろうが、日遥上人の「父に贈れる書翰二通（内一通は本妙寺に現存する草案の浄書）と、父壽禧が日遥に與へた書翰の草案」の存在自体が戦乱による一少年の運命と一家の不幸をありのまま物語っている。

この書簡を発掘した大村大代（当時釜山地方法院検事正）は、その8年前に「清正生前自ら仏工を指揮して己れの肖像を作らせたが、薨去の翌年、彼れ（＝日遥上人）は『法華經』八卷、二十八品、字数六万九千三百八十四を浄写して、其の靈像の胎内に納めし事」が発見され、その顛末と日遥上人の略歴とを掲載した当時「九州日日新聞」記事から調査に踏み出したという。『日鮮史話』にふさわしい史跡の発掘が相継いだのである。

さらに、この悲運の主人公を「美談」の主人公に転換させるために、松田は、仏教を弾圧し僧侶を賤民扱いした朝鮮とは対照的に、神・儒・仏の三者を重んじていた日本では、異邦の人たるに拘はらず、護法布教の權威を与へ、日遥上人というよりも「高麗上人」と称し尊敬されていると、両国の社会事情の相違と思想文化の逆転状況を強調していた。

實に彼れが日本の教化宣揚に貢献したる努力は偉大なものであつて、其の永遠に尊仰せらるゝ功德の上よりしても、炯々たる眼光は、當時已に三百年後の今日の氣運を透視したか

の如く思はるゝ。由來佛教は廣大無邊で之を施すのに境界は無い。然るに往古日本の先導となりし朝鮮の佛教は、李朝の政策上、根蒂より芟除せられ、殆んど枯死するに至つた。而して其の枯死は遂に國力の衰頹を來たしたのである。今や氣運旋回、佛教は東方より逆轉して、人心統一の先驅と爲り、民族融合の媒介と爲り、温かき光明は乾燥せる山河の上に放たれ、枯死したる草木も漸く蘇生して、百花將に開かんするに近づいた。日遥上人も亦た地下に莞爾たるであらう。

松田は、日本の教化宣揚に貢献した日遥上人の「炯々たる眼光は、當時已に三百年後の今日の氣運を透視したかの如く思はるゝ」といい、今後、日本仏教が朝鮮で「人心統一の先驅」「民族融合の媒介」になることに期待⁴⁴を寄せ、「地下に莞爾」たる日遥上人を想像しているのである。

この記事に附録された金宦（朝鮮某地の人なるか不明、一に姓名を良甫鑑と云ふ）は、「文祿の役、夙に加藤清正の轅門に降り、爾來其の嚮導となつて、地勢風俗等の諮問に応じ、大に其の軍に貢献した」實に裏きり者だが、「彼土の国政紊乱、人心腐敗せるとは反対に、日本の志操堅固にして義烈の風に富めるを慕ひ、殊に清正の恩遇厚きに感激し、其の凱旋の時随從して熊本に至り、俸禄二百石を受けて仕へ居た。然るに慶長十六年六月二十四日、清正の薨去するや、最早一日片時も此世に居るべからずとて、遂に割腹せんと至つた」と、朝鮮社会の問題を指摘し、金宦の「義烈」の正当性を暗示する。この金宦の「義烈」のゆえに「常に墓前に香を焚き花を供す人の絶え間なく、「死後已に三百有余年を経るも、彼れの忠魂毅魄が世を感動しつゝあるを知るに足りる」と結んでいる。ここで松田は、まるで、第二の金宦の誕生に期待しつつ、

日韓併合と植民地朝鮮支配に直接かかわり「朝鮮貴族」に列した「親日派」「売国奴」の遠い未来像をあらかじめ示しているように思われる。

第三に、「朝鮮より出でたる佐賀の儒者洪浩然」(1926.7.稿、第二編)の例は、文禄役の第二軍の将、加賀守と称し肥前佐賀の藩祖となる鍋島直茂による「美談」である。

彼れは到る處に戦功を奏すると、もに、黎民に對つて大に仁慈を施した。殊に加藤清正より臨海・順和二王子を預かりて、百方慰安に努めし事は、世の稱する所であるが、更に最も美談として傳ふべきは、晋州城攻撃の際、親故に離れし一少年を愍みて、海陸遠く佐賀に送り、これを愛育して成人せしめた事である。少年、姓は洪、名は浩然、別に雲海と號した。彼れ深く撫養の恩に感じ、鍋島氏に家臣として仕ふる五十餘年、直茂の嗣たる信濃守勝茂の薨ずるや、遂に殉死して壯烈の名を後世に留むるに至つた。

「晋州城攻撃の際、親故に離れし一少年」の物語りを、松田は、「臨海・順和二王子を預かりて、百方慰安に努めし事」よりも最上級の「美談」と激賞する。松田もいう「朝鮮役中、最も猛烈」なる、軍民全滅で陥落した激戦地が、この「美談」がはじまる舞台であった。

その後、日本で修学の際に、浩然と日遙と同学であったこと、ほかに少年捕虜が存在していたことを明らかにする。

予は今春佐賀に至り彼れの遺墨を見て、圖らずも其の書体が、能筆を以て聞えたる彼の熊本々妙寺中興の祖、日遙上人に髣髴たるを思ひ出した。上人も亦た壬辰役中、加藤清正に扶けられたる齡十三の少年で、日本に渡來後、五山に於て學修した。恐らく浩然と同じ師に

就いて書を學んだのではあるまいか、或は當時斯る書風が行はれたるものであらうか、併し其の詮索は別にしても、本妙寺に保藏せらるゝ日遙が故國の父に贈りし手翰の草案中に「下書則ち九月盡日傳受せり、且つ此國に於て知心の友無し、只巨昌の李希尹・晋州の鄭逖・密陽の卞斯循・山陰の洪雲海・扶安の汝英・光陽の李苴等五六人と朝夕故國の事を談話するのみ」と書いてあり、雲海は即ち浩然の號であるよりすれば、日遙と浩然とは天涯千里の異域に於て友とし親しみたる事は明かである、而して浩然は儒道を修め、日遙は佛教を究め、其の身を立つるに於て境遇を異にしたが、戦後孤獨の身を以て異域に渡り慈悲心深き人々に愛護せられて恩誼に感じ、共に名を後世に揚ぐるに至りし事は全然髣髴たるものである。

書に造詣のある松田であった故に、浩然と日遙の同学の内容も推測できただろう。松田は、『日鮮史話』にそれぞれ浩然の筆蹟2点と日遙の筆蹟4点の写真を収録している。日遙の父への手翰の草案の浄書したものが実家にあったことは、前述のように大村氏によって確認できた。佛教を究めた日遙「美談」は彼自身のドキュメンタリであるのに対して、儒道を修めた浩然の「美談」は、五代目になってはじめて語られるものになる。

松田の説明によると、五世安常の妻が古賀精里の妹で、間に子無く洪浩然の血統は断絶したが、精里の子煒を養子とし、爾来洪氏は佐賀の名族として重んぜられ、子孫は連綿として栄える。精里は、佐賀藩学弘道館の教授となり、のち徳川幕府の常平鬻の儒員に転じ、二洲尾藤良佐・栗山柴野彦輔とあわせて「三助」といわれ、また「寛政三博士」と称せられた人物である。この古賀精里によって洪浩然「美談」が出来上

がり、後世に語り伝えられるようになった。さらに松田は、つぎのようにいう。

浩然が斯くも日本屈指の碩儒古賀精里の子によつて其の家を繼續されたる事は、死して尚ほ餘榮あると謂つてよい。併し是れ畢竟彼れが壯烈なる行爲に基因するや明かである。精里は文化八年（純祖十一年癸未）幕命を帯びて對馬に赴き、通信使金履番等の一行に應接した。履番は精里の著たる『大學纂釋』の序文を作り極めて學徳を稱揚し、又一行中の文字ある輩は、其の揮毫を乞ふて以て歸橐に充たすに至つた。今尚往々朝鮮に於て精里の筆蹟を見る事あるは、多く其の時のものである。當時精里の談が浩然の事に及びしは言ふまでもあるまい、思ふに彼れ等一行も必ず奇縁に感じたものと信じる。

このように古賀によって語られるようになった浩然の事蹟は、通信使との交流の際に絶好の話題であつたらうし、今になって松田によって再演されたのが『日鮮史話』なのである。

このほか、松田は、佐賀での見聞3点を附載している。

① 鍋島加賀守直茂あての二王子の謝状

② 唐人町の鏡圓寺：いづれの武将も文化に資すべき学者・医者・陶工・機工等の優なる者を物色し、これを日本へ送つた。此等の人を指して、俘虜と云ふけれども、それ相当に待遇し、衣食に足るの資を与へ、中には土籍に列せしめ、俸禄を給した者も少なくない、戦役に帰化したる朝鮮人を居住せしめた処に、朝鮮人の帰依の爲めに、鍋島家に於て創立せられた。

③ 鄭竹塢：鍋島直茂が、朝鮮役に連れて帰りし学者であつた。彼れは佐賀に住して詩書文芸を教へ兼ねて医を以て蓮地藩祖鍋島直澄（甲斐守と称す、勝茂の子、直茂の孫に当る）に仕へ、

采地を藤津郡吉田に給つた。遠裔に当る鄭幽碩と云ふ人も医を業として、近年まで同郡五町田に住んで居つた。

ちなみに、洪浩然資料の提供を受けた佐賀図書館長西村謙三氏が、浩然の後たる洪家に生れ西村姓を相続せられたとも記し、松田は「美談」伝承の現状をも伝えている。

第四に、「紀州徳川家の大儒李梅溪」（1927. 5. 稿、第三編）は、徳川御三家で紀州家の始祖となる家康第十子にあたる頼宣が「朝鮮人を父とし日本人を母として和歌山に生まれたる学者李梅溪を、師とも傳とも亦友とも敬愛して、風教の維持に努力したる美談」である。松田の説明によると、その父李真榮は、陝川府君李瑤の五代孫、文禄二年、当時22歳で捕虜になって護送され、卜筮を以て生計とし、学も講じた。56歳の時、頼宣が侍講に挙げてから上下から尊敬されるようになった。病にかかり、1633年世を去る。享年63歳。梅溪李全直は、幼いより家学を受けて経義に通曉し、父が没した17歳の時に、藩の儒官永田善齋を師としてその誨督を受けることとなり、のちに善齋の娘と結婚する。梅溪は、頼宣の世子光貞の傳を兼ねて、その訓育の重任を委ねられる。父を殺して反省もしない子を教誨し善導した梅溪（44歳）に、頼宣（59歳）が自ら立案した訓諭を書かせて出来た『父母状』を紹介し、これと関連して、第二代藩主となる光貞、その第四子吉宗が第八代将軍として聡明の君と称せられたことを紹介する。梅溪には嗣子がなく、養子が梅溪死後、梅溪の職を継ぎ、その後裔は継続し、真榮から十代になつても李を姓とし、現に大阪の居住であるという。つぎの文を引用しておく。

真榮を扶助したりと云ふ、朝鮮の人にして海善寺の僧侶たりし西譽の事蹟の不明なるは遺憾である。明治二十五年頃日本に亡命したる

朝鮮の志士権東壽も久しく同寺に食客と爲つて居た。思ふに朝鮮人の墓在りと云ふ縁故から身を寄せたものであらう。東壽は石雲と号して書を能くした。今も同寺に「圓滿」と書せる大字の額が懸げてある。

甲申政変以後、日本亡命中である金玉均・朴泳孝暗殺の密命を受けて来日した権東壽のことまで、書に造詣のある松田だから、知っていたかもしれない。

第五に、「朝山素心と李文長」（1930. 6、続第二編）の例である。「我が列聖世々学を好ませたまふが中にも、第百九代後光明天皇の易を朝山素心に講ぜしめられし睿慮は、殊に景仰すべき美談となつてゐる。而して朝山素心の易道は、朝鮮の人李文長より学び得たるものなるが、此の李文長の日本に渡りし事につきては、諸文献の記するところ区々なるを遺憾とする」と書き出した松田は、『先哲叢談』、『大日本人名辞書』、『広文庫』の素心関係記録に、「朝鮮の使」「朝鮮使節」などとあり、その「杜撰」さを批判し、牧墨仙の『一宵話』の「朝鮮易者」⁴⁵により、李文長が「朝鮮役の俘虜」であることを明らかにしたうえ、朝鮮通信使記録である『東槎録』で確証⁴⁶をつかむ。これらについての松田のコメントはこうである。

（前略）彼れが曩きには大阪に在り城中諸將の信頼を博し、更に京都に於ては朝山素心の如き篤學の士より師とし仰がれ居たるを見ても、既に相當の待遇を受け、歸化同様の身を以て安穩なる生活を爲やしを知るべきである。されば彼れの他の被傭人に向つて「朝鮮の法、日本に及ばず、生活甚だ艱く、活を資する未だ易からず、本土に還歸するも少しも益する所無し」と曰へる如く記せるは、全くそれに相違無かるべく、寔に彼れは能く日鮮兩域の

内情を透観せるものであつた。又「遍く遊説を行ひ、以て其の國に向ふの心を絶たしむ、被虜の人、皆な文長の誘ふ所と爲り、出で去るに意なし」と曰ひ居るより見ても、彼れは日本に在りし多くの俘虜を左右する程の勢力を有しめたものとも推測さるゝが、併し又當時日本に居たる朝鮮の人が、李文長等の誘ふ所と爲り、國に向ふの心を絶ちしとのみは言はれない。何となれば、俘虜と云ふものゝ中にも、自國の苛斂誅求を嫌ひ、特に好みて行きたるもあり、又俘虜と爲りみたる間に、日本の人情風土の美なるを喜び、遂に安住に決した者も多かつたからである。

李文長の日本での生活のほか、その墓や子孫についての情報提供を求めた結果、この記事の読者から情報提供の手紙が届き、子孫は、対馬藩士の李田（スモタ）家であり、子孫の現戸主李田完三は大邱裁判所書記、その末弟は俵を姓とし総督府に奉職しており、その父李田登太は奈良市長をつとめたこと、李文長の墓は対馬国分寺にあることがわかる。「日本易学の功労者李文長の墳墓と後裔」（『朝鮮』1932. 5）がその記事である。

（3）朝鮮通信使

つぎに、江戸時代の朝鮮通信使については、前述の古賀精里と金履喬もよい例であるが、さらにここでは、「人見鶴山と洪滄浪」（1925. 11、稿、第一編）を取りあげたい。「豊太閤の征役以来、朝鮮との国交断絶せるを相互の不利として、平和回復を図りしは徳川家康であつた。朝鮮も亦た之に共鳴し、慶長十二年（宣祖四十年丁未）より文化八年（純祖十一年辛未）に至る約二百五年間、通信使なる者を送る事十二回に及んだ」と、朝鮮通信使の由来を簡単に記したのち、松田は、朝鮮側の態度や通信使の日本観の問題を指摘する。

併し儀禮の虚飾を誇りとする習風は、毎回四百内外の多人數で、天文・地理・醫相より、曲馬・酒豪・博徒まで、苟も藝を以て名ある者を従はしめ、殊に文詞自慢の事とて、必ず之に長ぜし數人を選び入れた。此等の人々の唱酬は、日本に於て珍重し、當時直ちに刊行して弘く國內に播布した。今尚ほ存する其等の書を読むに、巧みに筆を弄し、親交の情を述べ欣慕の意を表してゐる。然るに其の自國に刊行したる彼等が當時の紀行や遺稿等を見ると、日本に遺されしものとは相反し、蠻夷と呼び文盲と嘲り、冷笑の言、猜疑の辭を吐いてゐるのが尠く無い。又日本に於て作りし詩文等は全然遺稿に載せて居らぬ者さへある。之を日本が其の唱酬の詩文、筆談等を、悉く公然刊行して敬意を表したのに較ぶると、寔に霄壤の相違である。

通信使の「美談」は、このような批判の上、展開される。当然ながら「二百五年間十二回に亘る多くの文士であつた故、其の中には衷心日本を親愛し、個人間の交誼に於ても永く美談を留めた者が無いでも無い。」その一例が人見鶴山と洪滄浪である。

彼れが鶴見に寄せた書翰も亦た『柳下集』に「與日本野鶴山書」と題して載せてゐる。此の『柳下集』は、彼れが死する前年、病床に在つて、一生涯に於ける多數の詩文中より、得意の作だけを精選したものであるが、他の人々が日本に行きし事さへ有耶無耶に附して居るのとは違ひ、何の忌憚も無く、鶴山に寄せたる書翰や、桃源よりの返書等を公にしたのは、前の詩に謂ふ「丈夫心似日」で、彼れが日本に對する交情は、至誠を以て始終を一貫した。而して一方、日本に於ては、正徳二年五月、即ち東郭等が日本より歸着したる

翌々月、早くも『鷄林唱和集』・『朝鮮人筆談』等を出版し、之に滄浪の「奉日本國野鶴山書」と、桃源の「復朝鮮國滄浪洪老先生書」とを載せた程で、既に今より二百十餘年前、珍しく亦慕はしき美談として、江湖に喧傳せられたものであつた。現に今日に於て之を見るも、實に内鮮融和上の模範と爲すべき美談である。融和と云ひ、親善と云ふも畢竟相互間に於ける至誠の誘徹に外ならぬ。言に表裏あり、行に陰陽ありて融和の出來べき筈は無い。滄浪の文名は朝鮮の多くの人に知られてゐる。然し其の美なる行爲を知る人は尠ない。これ此稿を草した所以である。

互いに交わした詩文、手紙、そして對話までも出版して残している人見鶴山と洪滄浪にみられる「至誠」の「交情」は、「内鮮融和」の模範になるべき「美談」であり、このような「相互間に於ける至誠の誘徹」こそ融和につながるものと強調している。桃源は鶴山の子。東郭の名は李磧、1711年通信使の製述官をつとめた。⁴⁷

平和回復のために再開された通信使の史跡において、松田は「虚礼」「文事自慢」、「冷笑」「猜疑」とともに、「至誠の誘徹」の「美談」をも発掘し、これらをもって「内鮮融和」への道しるべとしているのである。

いっぽう、通信使との関係を、日韓併合の際に活動した人物関係にたとえた説明が「毛利氏の朝鮮通信使接待」（1927. 3. 稿、第四編）の結びにある。この引用文にある、物徂徠に師事し、のちに萩明倫館第二代祭酒となる周南山縣孝孺は、25歳の時、正使趙泰億と見事な唱酬をしていたのである。

（前略）明治の代になりて、日鮮兩帝國を結合して利害共通の主義を鞏固ならしめたる、伊藤統監・曾根統監、又愈々東洋の平和維持

上、韓国が禍亂の淵源たるに顧み、之れを帝國保護の下に置き、永久に併合するに至りし當時の寺内総督・山縣總監、いづれも毛利氏の家臣にして、青年時代明倫館に學び、周南の遺風に薰化せられし人たるを以てある。

更に又奇とすべきは、韓国併合の際、李完用とよもに、萬難を排して最も盡瘁したる趙重應は、正徳元年の正使趙泰億の遠裔なることである。泰億が周南の才を愛し、特に延見して唱酬を共にしたる美談は、既に叙述した。而して其の唱酬せる二百餘年の後、周南の遺風に薰化せられたる長州出身者と、泰億の遠裔とが、赤誠を吐露して握手し、國家千年の大計を成就せるのは、洵に遠き因縁ある如くに感ぜざるを得ぬ。

松田は、毛利氏の朝鮮通信使接待を、保護国のときの初代統監伊藤博文・二代総監曾禰荒助、日韓併合のときの統監寺内正毅・副統監山縣伊三郎といった毛利氏の長州出身者と、通信使趙泰億の遠裔である韓国農商工部大臣趙重應とが日韓併合の際に握手したことに重ねあわせ、みごとに「國家千年の大計を成就せる」「美談」に仕上げているのである。

(4) 退溪李滉の江戸儒学者への影響

最後に、退溪李滉の江戸儒学者への影響についてみてみたい。

日本の朱子学受容については、前述の大内氏の功績として京師学と海南学の存在があったが、退溪との関係やその影響においては、藤原惺窩を抜きにしては語れない。「其の学問や性格につきては、豊太閤の証明事件に関し天正18年（宣祖23年）朝鮮より使したる金鶴峰（名は誠一）が、藤原惺窩に語りたるを以て、日本に知られし最初と信じる」（『日省録と朱子書節要』）と松田がいうように、両国の外交関係が険悪化していく最中に退溪の存在が日本に伝わり、7年にわ

たる戦乱のなかに捕虜の姜沆と戦利品の書籍によって伝えられた退溪学門は、藤原惺窩をはじめ江戸儒学の開花に甚大な影響を与え、また近年、明治天皇の侍講元田永孚まで続いていた。

松田は、1926年10月に、慶州古跡探訪からの帰路に大丘、義城、安東を訪れ、陶山書院を訪問している。「陶山書院の追憶」（1929. 8. 稿、第六編）は、その4年後、退溪没後360年⁴⁸に訪問当時の記憶を記述したものである。

予は忠鎬氏に退溪の學徳博淵にして其の功績は内鮮兩域に亘りて永久に存するものなることを縷述し、次で書庫に藏する珍本『李退溪書抄』の編者なる村士玉水の事に関して知るところを語つた。忠鎬氏は曰ふ、これまで内地人にして來りて本院を觀たる者其の數甚だ多きも、遠祖の功績を語る君の如きは極めて稀れに、殊に玉水の事につきては知る人無かりしに、始めて詳に聞くを得たるは實に限り無きの快事にして積年の冥霧を一掃せりと。遂に氏は温惠洞に歸る予定をやめ院奴に命じて鷄豚を割烹せしめ、酒盤を侑めて予を饗應し、夜深に至るまでも談を續け、遂に枕を並べて閑存齋内に醉臥した。實に予としても近來に無き快事を覺え遠路訪れ來りし甲斐あるを喜んだ。

このように松田は、退溪子孫に会って、これからみるような、江戸時代の儒者に退溪が尊敬され、退溪の著書が重宝されて復刻されていたことを紹介し、感激した忠鎬氏と「至誠の誘徹」の交遊を楽しんだ。

以下、「自省録と朱子書節要」（1927. 12. 稿、第六編）により、その例を簡略に見てみたい。

第一に、退溪書の日本での復刻例⁴⁹であるが、その一部を記しておく。

『天命図説』、慶安4年孟春、京都中野小左衛門

発行。「元和辛酉孟夏日 羅山人道春跋」がある。『自省録』は、「萬曆13年乙酉冬羅州牧開刊」を「萬治2年乙亥冬11月石斎鶴信之訓点 寛文5稔乙巳3月吉旦二条通玉屋町村上平樂寺開板」とある。

『朱子書節要』は明暦2年京都(書肆荒木利兵衛)の翻刻があり、寛文11年再版(京都二条通玉屋町村上次郎右衛門刊行)には「黒岩慈庵跋」がある。

第二に、退溪の著書のうち『自省録』を尊重した日本の学者を次のように紹介している。

① 大塚退野は、孚斎から退野と号を改めたのが「退溪を尊信せるに由ると憶測する人もある」ことを紹介し、『退野語録』を引用する。

吾二十八より程朱の學に志す。其前陽明の學を信じて良知を見るが如くにあり。然れども聖經に引合て平易ならず、竊に疑を起す。然して『自省録』を讀、内に程朱の意味を曉り、始て志し候なり。此比同齋も陽明の學を廢して程朱の學を信ぜらるゝを聞き、逢て語り侍る。同齋存生の内、途何れの所に見置れしも予知るに及ばず。

② 蕪孤山は蕪慎庵(また震庵)の子で、熊本時習館の二代学頭であった。前述の高本紫冥がこの後と継ぐ。

③ 湯浅常山は、「備前の岡山に生まれた。幼にして學を好み、長じて江戸に遊び、服部南郭に就き古文辞の學を修め、學成りて其の嘖々たる声名太宰春台等と同ふし、池田侯に仕えて家老格に列せしも、身を持すること謹嚴に、直言を以て貶黜せられ、これより門を杜じて客を謝し、著述自ら娛み、天明年間74才を以て没す」のだが、『常山樓筆余』で『自省録』「凡事到無可奈何處、無恰好道理、則不得已、擇其次者而從之」(「答李叔獻」)を「千古の名言」というべ

きだとし、日本の事例として元弘の乱の「新田左中將の義兵」を挙げたのち、つぎのような文を紹介する。

古今皆決斷するは、其次なるを擇て従はざるにあらざるはなし。是れ英氣の故なり、英氣害事と、程朱のいはれし言ぞ、却て大に事を害すべき、只亂世干戈の事而已にあらず、治平の世も亦然り、十全を謀る時は、いかで事を決すべき、易の泰の九二の解にも、包荒用馮河と、聖人も教へたまひき。

「武士たる者は、寧ろ文事を廢するも、武事を廢すべからざる」を持論にし、朱子学派の人でもない常山が「やむを得ずしてその次たる者を選びてそれに従う」という退溪の言をこのように信じていたことを、「洵に伝ふべき美談」と松田はいう。そして「同じく朱子学のみを信仰しつつも、尚ほ幾多の党派に分かれ、論争常に止む時無かりし朝鮮の学者には、到底夢にも想ひ及はざる事実である」と結ぶ松田の結論には、植民地朝鮮人への新たなメッセージが潜んでいたように思われる。どうすることもできない植民地朝鮮人が「その次たる者を選びてそれに従う」べき道が何かは、ここであらためて言う必要もない。

④ 横井小楠は、「平素、李退溪と大野退野とを尊信すること篤く、其の実学派の名称も退野の學より來れる」といわれる「実学派の領袖」であるが、松田は「李退溪と蘇峰先生とは、尠からざる因縁有之候。其の子細は先生の家嚴洪水翁は、横井小楠の高弟にして、小楠は李退溪の崇敬者なれば、自然其の感化を受け、洪水翁は大の退溪好きとなり大正3年4月93才の高齡を以て逝かれたるが、逝去の数日前まで日記を認め、其の中に退溪の言を録しあるなど、如何に其の傾倒の深甚なりしかを推察すべく、蘇峰先

生また退溪の学旨を好まれ、これ迄も屢々国民紙上に論評せられたる事を記憶致候」と、当時日本輿論の一部を担っていた徳富蘇峰との関係にも言及する。

第三に、『朱子書節要』を愛読した人としてつぎのような人が紹介されている。

① 山崎闇齋については、「山田思叔書」・「闇齋先生年譜」の「朱夫子の後、道を知る者、薛文靖・丘瓊山・李退溪也。文靖の見識の高、文莊博文の富、朱門の後、其の右に出づる者ある無し、其の後特に李退溪のみ。蓋し退溪平生の精力、尽く『朱子書節要』に在り、以て其の学の醇なるを觀る可き也。」を紹介し、次の佐藤直方「韞蔵録対論筆記」を引用する。

朝鮮李退溪、東夷の産にして中國の道を悦び、孔孟を尊び、程朱を宗とし、其の學識の造たる所、大に元明諸儒の儔に非ざるなり。我邦中古儒道を崇び、王公以下これを學ぶ者亦た多し、而かも道學に至りては則ち未だ其の説有るを知らざる也。其の後朱書の我邦に來る、已に數百年成り、之れを讀む者亦た豈少なからんや。然るに未だ道學の正義を發明し、萬世不易の準則を爲す者を聞かず。近世獨り山崎敬義（闇齋）先生、其の書を讀み、其の人を尊び其の學を講ず。博文の富、識見の高、實に世儒の及び所に非ず、蓋し我邦儒學正派の主唱也。

儒学史上の李退溪の学問的達成と彼の学問に啓発された山崎闇齋の「我邦儒學正派の主唱」たることを明らかにする。

② 大塚退野は「送克齋渡辺秀才序」の「余壯年、本於李退溪先生之言、熟讀朱子書節要。窃窺得朱子之所為如是者、而記之終藏胸臆。信而從事於斯、幾四十年、雖知未有所得、不復他求、將終此生。」を引用紹介する。

③ 蕪孤山の「送赤彦齡序」の「朱子之学、行於本朝也久矣。而吾肥以僻在西海、未有其人。有大塚先生、奮然興起、乃始專力朱子之学。既得朝鮮退溪李氏所選朱子書節要而讀之、超然有得於心。喜曰是獲朱子之心者矣、遂尊信其書如神明云。先子之言曰、勉齋之狀朱子、不如節要之書朱子也。先子亦曰、百世之下繼紫陽之緒者、退溪其人也。二君之称李氏如此、其必有所見焉。」を引用紹介する。

④ 元田東野の有名な「程朱の学は朝鮮の李退溪に伝はり、退野先生その所撰の朱子書節要を讀み、超然として得る所あり、吾れ今退野の学を傳へて之れを、今上皇帝に奉ぜり」を紹介し、松田は、「教育勅語の大勲者」東野の学説が〈朱子→李退溪→大塚退野→元田東野〉と繋がっていることを確認する。そして、教育勅語奉読式において朝鮮人生徒が「教育勅語の起草者たる東野は退溪の尊信者であり、又退溪は朝鮮の人々の尊敬する儒学の泰斗たる事を弁まへて捧読する時は、其処に 明治天皇の大御心も偲ばれて無量の感が起る」といい、「内鮮同化」の効果的实践を促している。「但、茲に注意すべきは、日本の学者は、朱子の説にせよ、退溪の説にせよ、決してこれに盲従せず、必ず先づ国体に鑑み、之れに順応する如く活用して、以て皇威の宣揚、邦運の隆興、士気の振作に供した事である」と国体への注意喚起も忘れない。このように日本の国体思想における退溪の貢献を明らかにすることにより、退溪思想や朝鮮儒学の位置も自明になる。

以上のような紹介の上、松田は、後世学者の退溪学問に対する日本と朝鮮での違いを、つぎのように述べる。

退溪が平素の持説は、もとより朱子の學を根本として、それを敷衍せるものではあるが、其の文や諄々として親切に且つ明瞭に、何人

も解し易きこと宛かも筆端舌あるが如くてある。而も朝鮮の學者は、彼を朱子の再生と崇仰しながらも、其の理氣の説に力を傾注せる外、何等彼れの教訓を國家的に社會的に、履行する者は少なかつた。然るに日本の學者は之れに反し、弘く知識を世界に求むるを旨としたる爲め、退溪の説の如きも鋭敏に感得し、廣く且つ大に解釋して、之れを國粹に斟酌し、實際に應用するに躊躇せなかつた。

国家的社会的実践をおろかにした朝鮮と違って、「國粹に斟酌し、實際に應用するに躊躇せなかつた」日本、このような説明は、日韓併合と植民地支配を正当化する当時流行りの語りである。

いっぽう、日本の国体思想の代表的存在である山崎闇齋を師にした会津藩主松平正之の思想について、松田は「会津松平家と朝鮮」(1927. 9. 稿、第五編)でつぎのようにいう。

公は學を山崎闇齋より得、闇齋の學は公の地位と名望とに頼りて益々勢力を得、兩者意氣投合して所謂風雲際會の觀ありしが故だ。李朝五百年、朱子學を以て殆んど國教の如く爲したるも、あまりに禮の一端のみに流れ、遂に黨争の弊を醸し、國礎常に動搖して、支那に左右せらるゝに過ぎなかつた。されば、朝鮮の人が、公の卓偉の識見に畏敬せるは尤もの事と思はるゝ。

「朱子の學を借りて以て祖国の大精神を發揮するを要とした」という松平正之の会津藩は、松田5歳のとき、落城の運命にあつた。この会津藩と朝鮮との關係を述べるこの記事は、つぎのようなニュースから書かれたのである。

今般秩父宮の妃殿下を、會津松平家より迎へ

させ給ふや、天下齊しく欣躍扑舞、萬歳を嵩呼して慶賀し奉り、又松平家の既往を回顧せる者は、無量の感激を以て其の光榮を祝福するに、其の祖先保科正之公は、神儒兩道を調變して、大日本主義の教化を敷きし偉大なる勤王家なりと贊美せるもあれば、妃殿下の祖父に當る松平家第九代容保公は、文久・慶應國事多難の際、京都守護職として多年王事に盡瘁し、大に、孝明天皇の奇頼を蒙り、屢々密詔を傳へ宸翰を賜はりし如き、洵に遇優渥勲功絶倫なるものと稱すせられしに、時勢一變、冠履轉倒し、遂に戊辰の戰禍に罹るの不幸に陥れるも、而かも公も衷心、勤王に外ならざりし事は、恐れ多くも臆で、明治天皇の詔鑑を辱うし、天道循環、茲に會津松平家の無上の光榮を迎へたるは…(下略)

1928年9月28日「無上の光榮」の結婚式を迎える松田の感慨は、幕末の京都守護職としての受けた孝明天皇の奇頼、戊辰戦争の際の朝敵から赦された明治天皇の詔鑑、そしてこの結婚とともに、藩主の教化理念である「大日本主義」に収斂されている。この「大日本主義」は、松田も共有する精神であつたのは言うまでもない。そして、この記事の結びにはつぎのように書かれている。

會津松平家が祖先以來、當時異域たりし朝鮮に對し、深厚なる親しみを持續せる事實は、明らかに證し得らるゝのである。尚ほ此の機に於て特に言はんと欲するは、現に會津松平家は梨本宮家及鍋島侯と姻戚關繫の上より自然李王家とも近親の間柄たる事である。これを歴代の藩主・學者が、往時朝鮮に親しみを持せるに對照し、且つ明治時代となり、朝鮮に起れる數度の事變及び兩土併合前後に、幾多の危難を冒して開明の誘發に盡瘁し、今日

の基礎を築きたる志士・官人の中に、會津出身者の少なからざるを聯想するに於ては、如何にも朝鮮には盡きぬ因縁あるが如く、今昔の感は益々深からざるを得ぬ。

1920年の梨本宮方子と李王世子との結婚は、日韓併合の新たな象徴として様々な行事が行われたのであるが、松平家の地位がさらに確固たるものになるとともに李王家とも近親の間柄であることを喜ぶ松田は、朝鮮の「開明の誘発」に尽し、「今日の基礎を築いた會津藩出身者の多いことを、昔からの「尽きぬ因縁」と感慨深く述べるのであった。

以上、みてきたように、松田の発掘した交流史跡からは、友好の事例もあり、戦乱による恨みあいや相互蔑視の証拠も確認でき、数多く「美談」もあった。さらに松田は、相互の「至誠の誘徴」をもって、「内鮮融和」の可能性を示そうとしたのである。松田の学究や実践は、時代の要求に応えようとしておこなわれていたのはいうまでもなく、このような「内鮮融和」の「美談」は、絶え間なく続くものであった。⁵⁰

むすび

日韓文化交流の学術研究上の源流を確認し、その内容とその意義を明らかにするとともに、その研究史上の位置づけを試みるこの研究において、松田甲の「日鮮」交流史研究が始まって完成するまでの背景を探ることが、欠かせない先決課題であった。

會津落城を5歳で経験し、その後10年間の移住生活を余儀なくされた松田にとって、攻玉社での修学は、生涯第一の転機となった。文明開化、富国強兵、殖産興業が叫ばれる新時代を生きる

ために、松田は、最先端の技術といえる測量学を修め、できて間もない参謀本部の測量技手となった。大陸侵略を画策する参謀本部測量技手として、前近代が現存するアジア各地での経験を持ち、このときの詩作は、詩壇に紹介された。詩作を通じた人間関係は、松田の朝鮮での活動に大きな影響を与えたものと考えられる。

少年松田には、落城後、移住を強いられながらも生きていこうとした會津藩士からの精神的影響や感化が相当あったに違いない。それは、『會津日新館童子訓』の教えが「終生父の上に生きていたよう」だという養女ゆきの証言からも推測でき、松田の精神的支柱に、「大日本主義」があったと考えられる。そのゆえに松田は、秩父宮との結婚を旧藩主の松平家の「無上の光栄」と言ったのであろう。

このように松田の歴史体験と精神世界を考えると、その歴史体験に類似した状況に朝鮮人がおかれていたとみることができる。つまり、日韓併合と植民地支配に対比される落城と移住を経験した松田は、誰よりも朝鮮人の精神世界に対する同情的理解を持ちえたと思うのである。このような体験の持ち主であったゆえに、漢詩を通じた「内鮮交流上の役割」が評価され、「関係方面から懇請され」たときに、松田は「永住の決意」をすることができたと思う。独立運動の衝撃により「文化統治」のスローガンの下で「日鮮融和」が叫ばれていたとき、その最適任者として目され、期待された松田は、「日鮮」交流史跡の発掘と研究を自任したに違いない。これが松田生涯第二の転機となる。

松田にとって「日鮮」交流史跡は、新たな永住の地、朝鮮での「日鮮融和」の未来像を映し出す鏡のように見えたに違いない。松田によって発信された史跡からの語りや「日鮮融和」へのメッセージは、たとえば、裏切り者金宦の「義烈」、戦場で救われた少年捕虜であった「高麗上

人)、祖先思いの「李順」を「美談」としているばかりではなく、毛利氏の朝鮮通信使との交遊、そして日韓併合条約時の当事者の握手をもそれと重ねあわせて「美談」としているのである。これは、朝鮮人に日本の支配への従順を促す語りであったと思う。そして「美談」の主人公たちは、「日鮮融和」の理想的未来像をなしていた。

そのいっぽう、松田は、「その次たる者を選びてそれに従う」という退溪の言を「千古の名言」と信じていた常山のことを、「洵に伝ふべき美談」と評した。ここで、少年時の落城や移住という歴史体験と、日韓併合と植民地支配という朝鮮人の現実とが、松田の意識において、重なりあってきたと考える。つまり、松田は、どうすることもできないでいる植民地朝鮮人に「その次を選びそれに従う」決断を促していたのである。松田自身の歴史体験に照らしてみても、朝鮮人の真の決断があってはじめて、相互の「至誠の誘徹」によって真の「日鮮融和」が実現できると、松田は確信していたに違いない。

このように松田が「日鮮」交流史跡を発掘し語った「日鮮史話」は、もっぱら「日鮮融和」のために仕上げられたものであった。敗戦間際の1945年7月17日に朝鮮で世を去り、朝鮮永住を全うした松田が生前に夢見ていた「日鮮融和」には、皇軍になった朝鮮人青年の戦死「美談」もあったろう。「父は時勢に素直であった。気が向くと羽織、袴姿で三越などへ買物に出たりしたが、一度路上で注意を受けると、それからは国民服を作って常用し、ゲートルを巻いて外出した」と、養女ゆきが伝える松田晩年の姿は、彼の歴史体験から体現された「素直さ」に思えてならない。

さて、松田の「日鮮」交流史の語りは、以降、どのように受け入れられていったのだろうか。結論的にいえば、つぎの二つの特徴が考えられよう。

一つは、松田の「日鮮」交流史跡の発掘とその語りは、韓国併合とともに朝鮮人に強要される「日鮮一域」「日鮮同祖」「内鮮一体」の一方的な歴史像や、朝鮮社会の停滞、支配階級の無能や腐敗などの否定的な自己認識を植えつける朝鮮史像の言説とは次元を異にするという点である。歴史上の悲劇の出来事から「美談」を発掘した「日鮮」史話は、日本人にはより親しい朝鮮認識を、朝鮮人には新たな日本認識を持たせようと意図したのものとして、「文化統治」下の「内鮮融和」という1919年独立運動後の社会変化の中で現れた。そこに見られる歴史像は、否定的な朝鮮史像をともなっているものの、政治史を中心とした従来の史観とは一線を画したものであり、松田によって発掘された交流史跡は、交流史研究の新たな幕開けを告げるものであったと評価できる。

いま一つは、このような歴史解釈の提示により、朝鮮人の否定的な日本観を肯定的なものに転換させようとした目的とは裏腹に、むしろ朝鮮人に歴史観念上の優越意識をもたらせた契機もひそんでいた点である。両国文化交流の歴史において、中国文化の日本への紹介・伝達・供給者として朝鮮の役割は、決して無視することも軽視することもできないからである。停滞した朝鮮社会を文明化し、近代文明を知らない朝鮮人を一等国民にすると言いつつ、侵略戦争と植民地支配をし続けた日本は、アジアの盟主と自称するほど優越意識に溢れていたのである。前近代の語りと近代の語りが混在する中にあった松田の「日鮮」史話は、時代に迎合した恣意的解釈のゆえに、むしろ「日鮮」における「融和」の不可能性を反証してしまったかもしれない。両民族間の相互理解の新たなズレの原型がここにあったとも考えられる。朝鮮人に日本精神の体得を強いた皇民化政策の反動として、そのズレはさらに増幅していたから。

相互理解は、交流を通じて可能であり、そのズレも交流により生まれる。日韓関係がより密接になりつつある昨今、未来の歴史となる語りが作られている。隣国であるゆえに好事の数ほどトラブルも多い、両国が歩んできた史跡からどのような語り在今后、展開されるのか。それは、むしろ語り手よりも、聞き手の良識にかかっている。

*この研究は、2007年度埼玉大学総合研究機構研究プロジェクトによる「植民地期の『日鮮』文化交流史研究—松田甲の『日鮮史話』を手がかりにして」の最終報告である。

注

- 『朝鮮の今昔（歴代篇）』の「緒言」に「本書は、汽車中の少間、旅窓下の無聊の時などに、朝鮮の事柄の大體を知らんとする人に便せんと目的より、筆に任せて書き集めたるものゝ中で、開國より韓國併合に至る沿革に關する部分である。因つて姑らくこれを歴代篇と名づけた。そして執筆の目的が叙上の如くである故、考證とか研究とか云ふ方面には涉らずに、只廣く普通に行はれてゐる説に據り、平易簡略に叙述するを主としたまです、辭句の推敲などを考慮したものではない。昭和二年三月 著者識」とあり、『朝鮮叢話』の扉に「曩に予は見聞に係る隨筆百種づを掲載して『朝鮮雜記』と『朝鮮漫筆』なるものとを公にした。其の後又百種を得たるを以て、茲に『朝鮮叢話』と名づけて公にする。要するに此三書は姉妹篇である。而して著述の主意は、只朝鮮に關する事柄を初めて知らんとする人々に、幾分の参考となるを期したるのみで、敢て博識の士の覽に供すべき程のものでは無い。文辭の拙少にして興起に乏しきは、固より晒笑を甘んずる。昭和己巳三月 著者識す」とある。
- 権純哲「退溪哲学研究の植民地近代性—韓国思想史再考Ⅱ—」『日本アジア研究』第3号2006を参照。
- 復刻版『日鮮史話』（原書房、昭和51年）（一）「著者略歴」と同書（四）収録の養女松田ゆきの「著者について」、『明治漢詩文集』明治文学全集62、筑摩

- 書房、1983付録「略歴」（中村忠行編）そして次の資料をも参照した。国会図書館デジタルアーカイブポータル¹の国立公文書館アジア歴史資料センター提供資料「参謀本部大日記」の「参金第六八三号」に「札幌県後志国高島郡色内町十一番地 同県土族松田甲子五郎 右之者今般当本部測量課雇申付候条 此段召御通牒候也 十五年五月一日 参謀本部総務課 札幌県 御中」とあるが、身元確認の照会であろう。兄の幼名は「竹四郎」であり、松田の生れた1864年が甲子年であることから、「甲子五郎」が幼名であり、本名であったと考えられる。「参進第344号」（明治16年8月17日）に「測量課雇松田甲」と「参水第1404号」（明治17年9月13日）に「測量局雇松田甲」とあり、「参天第146号第1」（明治27年4月21日）以降は「陸地測量手松田甲」とある。「甲」と名乗るのは、参謀本部につとめることになってからである。韓國の国史編纂委員会の韓國史データベースには、『在朝鮮内地人紳士名鑑』356によるとし、「1868. 7. 7、北海道札幌区大通西11丁目（原籍）、岩代國若松市（出生地）。松田アキ子（1882年10月生）、松田ユキ子（長女、1910年5月生）。東京攻玉社土木科修業。1882年参謀本部陸地測量部に奉職し、日本地形測量に従事。1894年から1911年まで台湾、満洲、南清、蒙古、朝鮮などの各地方で任を以て調査。1911年4月朝鮮総督府臨時土地調査局に入り、在職。1917年現在、朝鮮総督府臨時土地調査局監査官」とあるが、妻の名前が異なり、本人の出生年が間違っている。
- 松田の実兄である大竹多気に対する紹介記事（注6）に、父は「松田俊蔵」とある。『慶応年間会津藩士人名録』（<http://homepage3.nifty.com/naitouhougyoku/sub3j.htm> 2007. 03. 08検索）によると、「松田俊蔵 石高25万石4人 御用所 二ノ寄合」は戊辰戦争のとき（8. 23）に滝沢町にて死亡（国産方勤）、とあり、ほかに「松田俊三 御書簡所役人 江戸藩邸上屋敷」もある。いっぽう「会津藩高田幽収名簿」「会津藩北陸高田謹慎名簿」「高田藩謹慎中雜記」「渋田見縫殿助羽州出兵戦記」等を参考にしたという「会津藩士謹慎者名簿」（<http://homepage3.nifty.com/naitouhougyoku/kinshin-sha-meibo/framepage1.htm> 2008. 7. 20）には、「松田俊蔵 高田 長遠寺 足軽分」とあり、一致しない。今後、さらなる調査が必要である。
 - インターネットで検索（2008. 6. 15）してみると、①「岩内の歴史」（<http://www8.ocn.ne.jp/~iwa-bun/>）明治11年（1878）条に「此の年、安達牧場は、小樽松田一茶と大竹作右衛門に貸下される」と、②「明

治14年船名録」(homepage3.nifty.com/jpnships/library/m14_senmei_list3.htm)に「札幌丸 風帆76トン 開拓 大竹作右衛門」と、③「明治16(1883)小樽の人大竹作右衛門、小平蘗川流域の石炭調査に着手」「同20(1887)大竹作右衛門、ヲキナイ上流の石炭開採」(www.obira.on.arena.ne.jp/obira-gaiyou-new/yoranshiryohen/oitachi.pdf)と、④「大竹は、文政11年(1828)4月会津若松に生まれ、向井流師範川島源之進、赤塚志賀之助に学んでいた。明治28年8月、小樽港の一角に児童水泳場が開設されると、その67歳で水泳教師を引き受けた。(明治36年76歳で死去)『向井流水法書』竹原榮著」(<http://www.h5.dion.ne.jp/~isiyama1/sub3.html>)とあり、北海道での活動振りをうかがうことができる。

⁶ 兄の大竹多気(1862~1918)について、藤原喜代蔵(1883~1959)『明治大正昭和思想学説人物史』1942によると、会津藩士松田俊蔵の子、文久2年生れ。同会津藩士大竹作右衛門に養われる。工部大学卒業、千住製織所技師(1895~1899、1905所長)、製織研究の為に欧州留学(濠洲1899、1905)、特許局技師(1908兼任)、東北大学農科大学教授(1910)、米沢工業専門学校校長(1911)、桐生高等染織学校校長(1915)…とある。多気(タケ)は、幼名の竹四郎に因んだものだろう。本稿完成後、参照できた小関栄助「大竹多気の生涯と染色技術による殖産興業への業績 多気との出会いと留学まで」『歴史春秋』第67号、2008.4によると、実母について、夫松田俊蔵は、幕府が北海道を東北の雄藩に領地を与えて警備させたが、その役人として赴任した。四男の多気は北海道戸切地で生み、ほかの五人の子も北海道で儲けた。次男は幼くなくした。その後江戸の上屋敷に移る。敗戦後、塩川での幽閉生活、その後新潟港を経由して斗南に移住した、という。塩川では郷校で学び、斗南に行っても日新館を田名部に作り、北海道に移住した一団も日新館を造り教育を施した、という。多気が大竹作右衛門の養子になったのは、慶応3年数え6歳、松田俊蔵は江戸上屋敷勤めであった、という。この説明は、会津藩北越高田謹慎名簿にある松田俊三が実父、すなわち松田俊蔵と同一人であるという仮定のもとでの解釈である。また、多気の教育について、塩川の郷校でほぼ2年間、「明治6年に東京に出て、英人ピアノンについて英語を修め、同7年攻玉社に入り」(松野良寅1991)あるいは「明治5年頃初めて上京して芝新銭座の攻玉社に入学された。明治7年に攻玉社を退き暫く諸種の学校に入りして勉強を続けたが、当時赤坂榎坂下に(中略)

工部省小学校というのがあって、工部大学の予備校と成って居ったので間もなく同校へ入学」(栗原古城M44)あるいは「明治6年実父と一緒に上京。小学校に入学した上、有馬私学校(塾)に入学して英語を学んだ。多気13歳」(孫の大竹俊樹)の諸説の紹介上、12歳ごろ英語私塾有馬学校に入学、14歳(明治7)に攻玉社入学。明治10年4月16日官費にて工部大学の入学が許可される、という。明治15年2月から翌年1月までの日記によると、多気の寮に実弟甲子が二日続けてきた、仕送りのお金を何度も甲子にあげている、という。重要な事実を明らかにしている研究である。検証の時間がなく、本稿はとりあえず、松田甲は会津若松市に松田常義と多美子の五男として生まれる、とした養女ゆきによっている。

⁷ 国立公文書館デジタルアーカイブ・システムで氏名による検索に、大正7年04月29日〇朝鮮総督府臨時土地調査局監督官松田甲外三名同上ノ件、の「監督官」とある。

⁸ このようにして近藤は、明治の教育界に大きな足跡を残されたことから、大木喬任、森有礼、中村正直、福沢諭吉、新島襄と並んで明治の六大教育家の一人として、明治40年の全国教育家大集会でその徳業が追頌された。その後、中学校・工業学校などを経て、現在学校法人攻玉社学園として存続している。『国史大辞典』吉川弘文館「攻玉社」「近藤真琴」項目を参照。

⁹ 「入社の際、社長に面接して差し出された一対の白扇は、成績優秀な塾生に、社長が格言とか何か有益な文句を書いて賞として与えるに使われた。」(32-33pp.)という。

¹⁰ 『東京の理科系大学』都史紀要11、東京都公文書館、平成2年第二刷。

¹¹ 東京都(都政史料館)、昭和37年。

¹² 『120年史』には、**和漢学**に、頼山陽「日本政記」、青山延子「皇朝史略」、岩垣松苗「国史略」、頼山陽「日本外史」、近藤真琴「仮名交り日本誌略」、内田政雄「輿地誌略」、曾先之「十八史略」、左丘明「春秋左氏伝」、謝枋得「文章軌範」が、**英学**に、ピネオ「文典」、ウエブストル「綴書」、ウイリソン「リーダー」、パーリー「万国史」、テロール「万国史」、ギゾー「文明史」、マルカム「英国史」、カッケンボス「米國史」、グードリッチ「佛國史」、スエル「羅馬史」、チャーバー「近世史」、ソーシー「ネルソン伝」、マコーレー「立憲政体史論」、ウェーランド「経済書」、ミッチェル「地理」、ガヨット「地理誌」、カッケンボス「窮理書」、ガヨット「窮理書」が、**数学**に、海軍兵学校「数学教授書」、近藤真琴

「算術初学」、攻玉社「代数学」、ホットン「算術」、デビス「平算書」、ロビンソン「算術」、デビス「代数」、トドハンター「代数」、ロビンソン「代数」、レーノルド「幾何学平面」、ウイルソン「幾何学立体」、テート「実用幾何」、トドハンター「幾何学」、ロビンソン「截錐代数幾何」、ゼーンズ「平弧三角」、ゼーンズ「三角原理」、ゼーンズ「対数」、ロビンソン「微積分」、チャンパー「対数表」が、航海に、ダフェース「航海書」、ゼーンズ「航海書」、ノーリー「航海書」、ボウジッチ「航海書」、海軍兵学校「航海教授書」、海軍兵学校「航海表」、海軍兵学校「船具教授書」、ローヤセル「航海書」、ルーミス「実用天文書」、トマス「航海書」、グリニッチ海軍大学「航海書」、ダナス「海員必携」、アルストン「海員必携」が、土木に、アンズリー「量地書」、ギルリスビー「量地書」、ネスビット「量地書」、ギルリスビー「高等量地書」、アンドル「製図書」が教科書として紹介されている。

¹³ 『120年史』64p. から再引用。

¹⁴ 下関条約(1895.4)により台湾割譲が決まると、台湾官民は1895年5月25日、「台湾民主国」樹立を宣言し、割譲に反対した。5月10日海軍大将樺山資紀を台湾総督に任じ、新領土の領収を命じた。日本軍は5月29日上陸以来、台湾官民の激しい抵抗を鎮圧し、10月ほとんど台湾全島要地を占領、11月6日に南進軍の編成は解かれた。また年末から翌年初めにかけて各地に残賊が蜂起し鎮圧され、爾来土匪の叛乱はあったが、その都度鎮圧された。縮刷復刻版『東洋歴史大辞典』臨川書店、1994(原：平凡社1937)「台湾の役」を参照。

¹⁵ 『国史大辞典』吉川弘文館1987の「参謀本部」「陸地測量部」を参照。佐藤尙「創生期の陸軍省参謀局—『陸地測量部沿革誌』を検証する—」『古地図研究』200号記念論集、1988、高木菊三郎『日本に於ける地図測量の発達に関する研究』風間書房、昭和41年をも参照。

¹⁶ 金明秀編『一堂紀事』1927収録の「己酉初夏伊藤博文 遯歸東京時 太皇帝陛下 設宴於咸寧殿 命分韻賦詩 賜韻 人、新、春三字」による「甘雨初來霑萬人(春畝伊藤博文) 咸寧殿上露華新(槐南森大來) 扶桑樞域何論態(西湖曾禰荒助) 兩地一家天下春(一堂李完用)」という連作詩にみるように、槐南の伊藤随行には、詩文外交ともいえる外交上の目的があったと思う。また同書には、1911年3月18日漢城倶楽院にて森大來の追悼会が行われ、李完用は参列し、輓詞を作るとある。

¹⁷ 『日本近代文学大事典』講談社1977「森春濤」「森

槐南」項による。

¹⁸ 上掲書「野口寧斎」項による。日清戦争に関する詩を集めた野口式太郎編『大森余光』新進堂1895と野口寧斎著『征露宣戦歌』博文館1904という題名からは、時代の風流としての漢詩の正体が伝わる。

¹⁹ 上掲書「森槐南」項による。

²⁰ 尹斗壽著『平壤誌』が明治30年、槐南森泰二郎・寧斎野口一太郎詩評、冬嶺小松直之進補評により『朝鮮歴史一大奇書 平壤誌』と出版される。小松直之進の「例言」には「一、朝鮮八道、江山最秀麗、形勝最雄壯者、以平壤爲冠、而 皇威之施於海外、與我歴史最有關者、亦莫若於平壤也、是所以上本志于梓、資於世也。一、余曩跋涉其野、親觀其狀、殆不忍言之、而快者三、曰微箕子之治績、曰詳鄭夢周與李舜臣之人物而得本志又其一也。乃如明倫堂學規、依然大學學則、所謂多山之石、可以磨玉者是也。一、本志欄外、不書姓名者、皆係余鄙見、蓋觸目風物、俯仰感慨、欲已而不能已也。他日或傳至朝鮮。憂國之士取以爲藥石矣。(以下略)」とある。森・野口らの朝鮮漢詩への関心の一端や、当時朝鮮への関心の高さをうかがうことができ、松田も例外ではなかっただろう。

²¹ 前掲『明治漢詩文集』所収の辻揆一「明治詩壇展望」(『漢学会雑誌』昭和13年12月、同14年4月)を参照。なお、『明治漢詩文集』には、松田の「義州統軍亭所見」「劍山嶺」「赤池」「北韓所見」「滬寧途上」「天橋」の漢詩6首が収録されている。

²² 清水靖夫『日本統治機関作製にかかる朝鮮半島地形図の概要—「一万分一朝鮮地形図集成」解題—』柏書房1986によると、朝鮮半島の五万分の一図において、併合以前のこれを通称略図といい、それを修正した第二次の地形図、第三次は三角測量に位置の基準を置いた地形図であり、第三次が基本図となるという。なお、松田らによるものは、全州・公州・忠州の図名で発行されたようだが、清州は、図名公州に含まれて、第二次と第三次の地形図とは異なり、第一次の略図ではなぜか「濟州」とある。

²³ 『朝鮮彙報』大正7年12月「雑録」を参照。

²⁴ 宮嶋博史『朝鮮土地調査事業史の研究』汲古書院1991によると、「土地の地目を定め、地盤を測定し、一区域ごとに地番を附す」土地調査は、国家体制の根幹となる重要課題であり、人民にとって最大関心事でもあった。

²⁵ 宮嶋上掲書430-31pp.

²⁶ 宮嶋上掲書534p. より再引用。

²⁷ この辞令以下の陸叙・昇進は、国立公文書館デジタルアーカイブ・システムの公開資料による。

- ²⁸ 『朝鮮通信協会雑誌』第20号(大正8.8.20)～第22号に連載される。本稿は奥州市立齋藤實記念館所蔵『朝鮮通信協会雑誌』を利用してもらった。ちなみに「朝鮮第一の高山咸北の冠帽峯 附、白頭山に関する雑話」(『朝鮮』1930.9、統第三編)の「白頭山に関する雑話」のなかで、「予は明治三十九年及四十年、参謀本部の臨時測圖部員として咸北六鎮と間島のちりを踏査し」と述べ、また日本人の白頭山登山履歴や新聞・雑誌報道について雑感を述べている。
- ²⁹ 「人見鶴山の贈位に関して」(『朝鮮』1929.1、第五編)に「予は曾て臨時土地調査局監査官の職を奉じ白頭山の地形測量を完成して以来、同山に関する文献を蒐集するに努めて居るが、今より六七年前或る朝鮮の学者より、洪滄浪、名は世泰、又柳下と号せる人の「白頭山記」なるものあるを教へられた。是れは李朝肅宗の三十六年(日本正徳二年)、国境定界碑設立の爲、め、支那の使臣穆克登と同行した金慶門に代りて事実を録せるもので、当時の状況を知らんとするには、比類無き好資料なるとの故であつた。斯くして其の遺稿なる『柳下集』より其の記文を獲たのであるが、其の際図らずも見出だしたるは、日本の野鶴山と云ふ人に関する数篇の詩文であつた。」とあり、また人見鶴山研究へ広がっていったことがわかる。
- ³⁰ 以上、通信局吏員養成所については「電気通信100年史」(<http://20c.itfind.or.kr/>: © 2003 by IITA)による。
- ³¹ 「朝鮮総督府機関誌『朝鮮』の哲学思想関係記事の分析」(研究課題番号09610042)平成9年度・平成10年度科学研究補助金基盤研究(c)(2)研究成果報告書、2000年3月、研究代表者権純哲を参照。
- ³² 全文を引用しておく。「明治四十有三年。八月二十八日。韓國合我矣。蓋往古韓國朝貢我久矣。及綱維漸弛。或叛或服。神后征之於前。豊公伐之於後。前後二役。一勝一不勝者。何哉。神后之時。漢土三國分争。不暇援韓。豊公之時則否。以明爲之後援也。予謂。韓國雖朝貢于我久矣。而非專屬我。又屬漢土。故漢土有事則服我。無事則叛我。是之所以叛服無常也。且我之服彼。以力服之也。固非若 今上以德服之之比也。韓國既合我矣。乃復朝鮮舊號。置總督府鎮之。寺内伯爲之督。吾友松田學鷗。奉職于陸軍参謀本部。從測地事。三十年矣。頃轉朝鮮總督府土地調査局。將行。微言。學鷗足跡遍海內外。南到台湾。北極北海道。跋涉朝鮮滿洲。入蒙古禹域。歷游江蘇・江西・安徽・湖北諸省。到處有詩。嘗從游秋月韋軒・森槐南・本田種竹等。甚工詩歌。故世以學鷗爲詩人。

然是非真知學鷗者也。學鷗有三兄。伯仲具在北海。從事農業。叔大竹博士。長米澤高等工業學校。使學鷗欲世所謂詩人乎。則宜從二兄嘯傲於北海耳。不然宜在都城。翩翩徵逐耳。而學鷗則棄而不顧。度戈壁沙漠。想胡元盛時。過吳楚故墟。哀英雄末路。俯仰低徊。凄愴惋惜。發而爲詩。爲歌。故世之不知者。猶以爲詩人也。學鷗所過南島北海。皆能量其廣狹深淺。不差分寸。嗚呼。孰知清俄二役。我兵所歷。不失其道者。學鷗與有力焉乎哉。自古以力服人者。未嘗不叛。以德服人者。中心悅而誠服也。今上德光被四表。格于上下。寺内伯克體 聖意。撫循新附之民。民皆安其堵。豈可與彼以兵討之。以力服之。同日而語哉。學鷗行矣。宜有以奉其職。而暇時作爲大雅之什。歌頌 盛徳太業焉。學鷗名甲。岩代若松人。今茲辛亥。年四十有八云。」

- ³³ 『毎日申報』1912.1.10には、「以文會の創立」とし、「内地人側では檜垣直右、國分象太郎、久芳直介諸氏又朝鮮側では朴泳孝侯、李完用伯、金允植、朴齊純、趙重應、閔丙爽、李容植、尹徳榮子等の發起により昨年に以文會を組織し、其目的は日鮮が相和して經學を講究し詩文を研究することに在ったが、今日まで總會を開くことができなかった。去七日午後一時より清華亭で其第一回例會を開いた。出席者は明石元二郎、檜垣直右、藤田嗣堂、小松緑、國分象太郎、久芳直介、松田甲、草場林太郎諸氏であり、朝鮮側では朴泳孝侯、李完用伯、閔丙爽、尹徳榮、李容植諸子、金嘉鎮、朴箕陽諸男及尹致旸、呂奎亭、徐相勲、尹喜求、鄭萬朝、鄭丙朝氏数名である。合議した結果、會頭に朴齊純子、副會頭に國分象太郎氏、幹事に松田甲、久芳直介、尹致旸、鄭丙朝諸氏を推薦し、尚且例會は孔夫子の祭日を期し春秋二回に開く事、毎月會報を發行する事、入會者は發起人中二名の紹介を要する事等を議決した後、雅會に移し、日暮後散會したという。」(原文は漢字ハングル混じり文)とある。

- ³⁴ 総督府機関誌『朝鮮』(1920.12)「風流通信」「以文會秋季雅集」淡叟。このほかに、同(1921.2)「風流通信」「以文會新年雅集」淡叟、同(1921.8)「詞壇」「以文會迎阪本園詞伯而設雅宴」(園阪本鈔之助)と「以文會席記事」(鄭丙朝)などがある。

- ³⁵ 「新井白石の詩と朝鮮信使」(1926.6.稿、第二編)

- ³⁶ 『朝鮮通信協会雑誌』(第20号1919.8.20～第22号)「文苑」の「漢詩」も「学鷗批」によるものであつた。『朝鮮通信協会雑誌』(第32号1921.11)に「漢詩はくだらないものか」(京城学鷗閑侶)という隨筆がある。

- ³⁷ 古蹟保存に関する制度的措置としては、1916年の

「古蹟及遺物保存規則」、1933年の「朝鮮寶物古蹟名勝天然記念物保存令」があった。

³⁸ 『日鮮史話』第二編への収録の際に、「京城曹谿寺内の東岳先生詩壇」と改めたうえ、このコメントの代わりに「近來郷土資料の蒐集に従事する人の多くなつたのは、寔に喜ぶべき次第である。此の東岳先生詩壇の如きは、京城の昔、殊に東平館（倭館）の位置などを研究する参考としては最も必要なものである。本稿は大正十一年八月の雑誌「朝鮮」に出したのであつたが、同詩壇が、あまりに人に知られて居らぬ故、旧稿の儘を揚ぐる事とした。歲月の計算なども五年前のものであることを承知ありたい。」とある。

³⁹ 「櫻を牛耳洞に移植せし洪良浩」（『朝鮮』1922. 11）は、通信使（1764年と推測）に依頼し桜の「苗木數百本を買ひ入れ、植栽した」ことを明らかにしているが、そもそも牛耳洞は、東岳李安訥の所有で、この六大文字を刻んだ周鎮の子澁から土地を交換する形で譲り受け、洪良浩が植樹をしたとあり、東岳の詩壇研究が洪良浩や牛耳洞の桜に対する研究へと広がっていったことがわかる。「洪良浩の事蹟」（『朝鮮』1924. 11, 12, 1925. 1）を抄録した「大和桜を移植せる洪耳溪」が『日鮮史話』第3編に収録されている。

⁴⁰ 「博多と朝鮮人の史蹟」（1925. 8. 稿）

⁴¹ 「徳川時代の朝鮮通信使」（1925. 6. 稿）

⁴² 國守進他『桜園寺内文庫の研究』國守進、昭和51年を参照。

⁴³ 「朝鮮より出でたる 佐賀の儒者洪浩然」『日鮮史話』第二編所収。

⁴⁴ 「駿河の清見寺と朝鮮信使」（『朝鮮』1929. 8、第五編）に、同寺現住、古川大航老師の朝鮮との深き関係を「老師は、明治三十九年、即ち日露戦役後直ちに朝鮮に渡航し、先づ平安北道寧邊の妙香山普賢寺に教会所を置きて布教に従事し、其の傍ら積年悪政の下に鄙賤視せられて、無為徒食に甘んじて居たる朝鮮僧侶を覚醒せんが為め、学校を經營してこれが指導に当り、以て萎靡振はざりし仏道の復興に尽瘁し、遂に臨濟宗妙心寺派の教義を普及すべく、其の根拠として京城に寺院を創立する等、實に千秋不滅の多大なる功績を留められた。嗚呼朝鮮と清見寺三百二十余年の昔より長く久しく關係の繋がる仏家の所謂因縁とも思はるゝ。」と紹介している。

⁴⁵ 関連部分のみ再引用しておく。「慶長の頃、朝鮮降を乞ひしにより、彼国の俘どもをかへし遣されしに（此降参の事は、いと長き話なり、後に云べし、王なりしよし也。一度に一千三百人かへされし事もあ

り。又朝鮮のみならず、唐人をもかへさる、これは明人の書にも見ゆ）李文長は、いかゞして此地にとゞなりしならん、甲寅の歲。大阪に亂おこらんとする時、城の殿主の上に、火烟忽ちも得う得る、城の内外驚き騒ぎ、一かけ走り旧藩とすれば、伊づくに火ありともみえず、人静まれば又もえ上る。（二月五日の事か）かゝる事度々ありしにや、片桐主膳正に命じ、李文長して占はしむ。」

⁴⁶ ここに再引用しておく。「康遇聖言ふ。昨夜天津の人と節話す、一人の言へるあり、朝鮮人李文長なる者、方さに倭京に在りてトを賣りて食す、被虜人等を恐喝して曰ふ、朝鮮の法、日本に及ばず、生活甚だ艱く、活を資する未だ易からず、本土に還帰するも少しも益する所無しと、萬端好しからざるの語を以て遍く遊説を行ひ、以て其の國に向ふの心を絶たしむ。被虜の人、皆な文長の誘ふ所と為り、出で去るに意なし。且つ其の心用ふる此の如し、故に使臣の來るを聞きて、或は尋問を慮かり、隱匿して出でずと云ふ。謂はゆる文長なるもの未だ何づれの地より來るを知らざるも、此の如き奸細の輩、事を異國に用ゆるは不幸の甚だしきもの也。可憤々々。」

⁴⁷ 「日本に名を留めたる李東郭」（1930. 2. 稿、続第二編）がある。

⁴⁸ 『日鮮史話』第六編は、その「はしがき」に「今年退溪の歿せる庚午の年より恰も六周の庚午に回還し、春秋を経ること正さに三百六十年、最も追遠の意を表すべき歳次たるが故で、乃ち記念の爲めに外ならぬ。…朝鮮に於て退溪を朱子の再生、又理学の泰斗と尊敬したる事實は明かなるも、日本の学者が、其の学説の党争圏内を超脱して、程朱の所謂主静居敬の旨に適へるを称揚し、朱子以後の第一人者として推崇したる証跡に関しては、尚ほ聞却せらるゝを遺憾とし、…今や世道人心漸く頽廢、最も風教の振作を要する際、日鮮儒学に關係ある退溪の潜功幽徳は、大に追遠頌述の要ありと思ふ。読者にして幾分にてても、本編特輯の意を諒察せらるれば幸である。昭和五年三月 松田甲識す」とあるが、この年は實に、教育勅語渙発40周年と重なっていて、朝鮮教育会機関誌『文教の朝鮮』に「教育に関する勅語と李退溪」を発表し、この「奇縁」を強調し、「朝鮮の儒宗である李退溪が日本の文教にあたえた功績を宣伝ないし表彰」することを建議している。注2の権論文を参照されたい。

⁴⁹ 阿部吉雄編『日本刻版李退溪全書』李退溪研究会1975の上に『朱子書節要』『延平問答』が、下に『李退溪書抄』『天命図説』『聖学十箇並封事』『易学啓蒙伝疑』『自省録』『朱子行状』『西銘考証講義』『七

先生遺像贊』『心経附註』が収録されている。

⁵⁰ 「朝鮮鴻儒宋時烈の遺跡『華陽洞』(『朝鮮』1923. 7)につぎのような附言がある。「(前略) 伊藤春畝公は大に時烈を私淑して、今上陛下が儲皇たりし明治四十年御渡鮮ありし時、公は宋子大全を献上せられたのであつた。予は嘗て懷徳の宋村なる同春堂即ち宋浚吉の遺址を訪ね「道廢古今隔 人亡絃誦空 当年推博学 後世慕遺風 深井水全尽 講堂春不同 絶無桃李笑 只見夕陽紅」の一首を賦して岩溪裳川氏に送つた処が、氏は「襄時金玉均古筠 流亡久在東京 其客寓係予僚友某家 時時相逢 宋浚吉之事談大所聞 言與李退溪実両朝大儒 宋浚吉邦人不多識之 然古筠不我欺也 今読此篇 転有今昔之感」と評語に代へて返稿せられた事である。嗚呼春畝公の時烈を私淑し、金玉均の浚吉を景慕せるは実に美談と言はねばならぬ。儒者にして英雄の氣象があつた尤庵・同春に対比して春畝・古筠二傑の行状を追懐する時は、何人も、湧然として感興を起るであらう。」とあるように、「美談」は続く。この記事と「成青城の文辞に見えたる華陽洞」は添削の上、「宋時烈の遺蹟華陽洞」『日鮮史話』第二編に収録されるが、この附言は削除されている。松田は、「今より十五年前と九年前と二回華陽洞に遊んだ」と述べる。15年前は、「全州・公州・清州・忠州等の方面を遍く踏査し」た参謀本部陸地測量部技手の時であろう。

【付録】 記事タイトルと稿年月・掲載年月の対照表

	『日鮮史話』	稿年月 (19—)	『朝鮮』	掲載年月 (19—)
第一編 1926. 3	徳川時代の朝鮮通信使	25. 6	徳川時代の朝鮮通信使	25. 7
	朝鮮の櫻と櫻桃に就て 附、躑躅	25. 4	櫻と櫻桃に就て	25. 5
	博多と朝鮮人の事蹟	25. 8	博多と朝鮮人の事蹟	25. 9
	朝鮮人の白衣に就て	25. 6	朝鮮人の白衣に就て	25. 8
	日本教化に大功ある朝鮮出身者本妙寺日邇上人 附、加藤清正に殉死したる金宦	25. 11	日本教化に大功ある朝鮮出身者本妙寺日邇上人	25. 12
	人見鶴山と洪滄浪	25. 11	人見鶴山と洪滄浪	26. 1
	朝鮮人を祖先とせる熊本の碩学高本紫溟	26. 1	朝鮮人を祖先とせる熊本の学者高本紫溟	26. 2
	李退溪の学説を研修せる薩摩の大儒赤崎海門	26. 1	李退溪の学説を研究せる薩摩の大儒赤崎海門	26. 10
	大内氏と朝鮮関係一斑	26. 4		
	山口洞春寺と朝鮮古書 附、櫻園寺内文庫	26. 4	山口の洞春寺と櫻園文庫	26. 5
朝鮮より出でたる佐賀の儒者洪浩然	26. 7	朝鮮より出でたる佐賀の儒者洪浩然	26. 9	
京城曹溪寺内の東岳先生詩壇 (5年後)		東岳先生詩壇に関する調査	22. 8	
李朝仁祖より寄贈せる日光東照宮の扁額と鐘 附、大猷朝の朝鮮燈籠	26. 5	日光東照宮の扁額と鐘	26. 6	
宋時烈の遺蹟華陽洞	24. 10	朝鮮儒者宋時烈の遺蹟『華陽洞』 成青城の文辞に見えたる華陽洞	23. 7 24. 11	
宋浚吉の郷里懷徳の同春堂と飛來庵	26. 2	懷徳の同春堂と飛來庵	26. 3	
新井白石の詩と朝鮮信使	26. 6	新井白石の詩と朝鮮信使	27. 8	
白頭山に登りし追憶	26. 6	白頭山に登りし追憶	26. 7	
第三編 1927. 7	紀州徳川家の大儒李梅溪	27. 5	紀州徳川家の大儒李梅溪	27. 6
女丈夫林氏と日本刀		日本刀と女丈夫林氏	25. 2	
朝鮮信使を誡めたる盤城の学者板坂晩節齋	27. 3	韓使を誡めたる板坂晩節齋	27. 4	
大和桜を移植せる洪耳溪 (旧稿抄録)		櫻を牛耳洞に移植せし洪良浩 洪耳溪の事蹟 (3回連載)	22. 11 24. 11, 12, 25. 1	
韓使の日東第一形勝と題せる備後鞆津の福禪寺	26. 12	鞆の福禪寺と朝鮮信使	27. 1	
朝鮮煙草の起源に就て 附、煙草に関する雑話	26. 9	朝鮮煙草の起源に就て	26. 11	
釜山鎮の永嘉台	26. 6	釜山鎮の永嘉台	26. 8	
光化門の上樑文と李裕元	27. 5	光化門の上樑文	26. 10	
第四編 1928. 8	日本より渡韓の僧			
朝鮮に関する山陰道の懷古	27. 9	朝鮮に関する山陰道の懷古	27. 11	
二百年前の朝鮮物語	27. 11	二百年前の朝鮮物語	27. 12	
李朝英祖時代戊辰信使の一行	28. 1	李朝英祖時代戊辰信使の一行	28. 1	
毛利氏の朝鮮聘使接待	28. 3	毛利氏の朝鮮聘使接待 (乾) (坤一) (終)	28. 4, 5, 6	
李朝時代の烽燧	28. 2	李朝時代の烽燧	28. 3	
第五編 1929. 8	駿河の清見寺と朝鮮信使	29. 7	駿河の清見寺と朝鮮信使	29. 8
会津松平家と朝鮮 (29. 3稿)	28. 9	会津松平家と朝鮮	28. 11	
朝鮮に名を博せる木下順庵	29. 4	朝鮮に名を博せる木下順庵	29. 5	
水足博泉と申維翰	29. 2	水足博泉と申維翰	29. 4	
朝鮮の甘藷に就て	28. 7	朝鮮の甘藷に就て	28. 9	
人見鶴山の贈位に関して (29. 6稿)	28. 12	人見鶴山の贈位に関して	29. 1	
享保乙卯日本人の朝鮮漂流記	29. 6	享保乙卯日本人の朝鮮漂流記	29. 6	
第六編 1930. 3	陶山書院の追憶	29. 8	李退溪の遺蹟陶山書院の追憶	29. 9
自省録と朱子書節要		李退溪の編纂自省録と朱子書節要	28. 12	
日本にて翻刻せる退溪の著書	29. 10			
陶山書院に蔵せる村士玉水の李退溪書抄	29. 10	陶山書院に蔵せる村士玉水の李退溪書抄	29. 11	
日本朱子学者の李退溪観	29. 11	日本朱子学者の李退溪観	29. 12	
李退溪の学流を顧みて	30. 2	李退溪の学流を顧みて (上) (下)	30. 2, 3	
僧玄蘇朝鮮の初旅	31. 1			
続 第一編 1931. 3	藤原惺窩と姜睡隠の関係	31. 1	内鮮儒学関係藤原惺窩と姜睡隠	25. 3
朝鮮通信使と近江路	31. 2			
江戸城に於ける朝鮮人の曲馬	30. 1	江戸城に於ける朝鮮人の曲馬	30. 1	
明倫学院の設立 附、経学院の概要				
李栗谷と海州の石潭	30. 11	李栗谷と海州の石潭	30. 11	
続 第二編 1931. 5	慶州の玉山書院	31. 4		
朝山素心と李文長 附、朝鮮の易に就て	30. 4	朝山素心と李文長 (日本易学の功勞者李文長の墳墓と後裔)	30. 6 (32. 5)	
朝鮮の部曲に就て		朝鮮の部曲に就いて	30. 7	
正徳朝鮮信使と加賀の学者	31. 2			
日本に名を留めたる李東郭	31. 2			
伝燈新話句解に就て	31. 4			
東人詩話の翻刻 附、懲志録	31. 4			
朝鮮儒教の大観	31. 3	朝鮮儒教の大観	31. 5	
朝鮮役と日本の陶磁器	31. 6	(朝鮮に縁ある三川内窰の善茶碗と三番叟人形)	(32. 1)	
名古屋の儒者と朝鮮の文士	31. 1			
李朝時代の郷約	31. 1	李朝時代の郷約	31. 1	
頼杏坪の地方行政	31. 5			
小退溪の称ありし李象靖	31. 6			
朝鮮第一の高山咸北の冠帽峯 附、白頭山に関する雑話	31. 4	朝鮮第一の高山咸北の冠帽峯	30. 9	